

第7回大会
関東近県生涯学習・社会教育実践研究交流会
報告書

Design to Next III

つながり、拓かれる生涯学習・社会教育

共催	茨城県教育委員会、茨城大学、茨城県生涯学習・社会教育研究会
主管	関東近県生涯学習・社会教育実践研究交流会実行委員会
協賛	NPO法人ひと・まちなっとわーく、NPO法人インパクト、NPO法人日本スポーツ振興協会 (公財)茨城県教育財団、(公財)日本教育公務員弘済会茨城支部
後援	福島県教育委員会、栃木県教育委員会、群馬県教育委員会、埼玉県教育委員会 千葉県教育委員会、神奈川県教育委員会、国立青少年教育振興機構 茨城県社会教育委員連絡協議会、茨城県公民館連絡協議会
協力	国立教育政策研究所、茨城県教育庁社会教育主事会

<目 次>

○はじめに	1
○大会報告	
・大会テーマ及び開催形態	2
第1部	
・基調講演	3
・インタビューダイアログ	5
第2部	
・オープニング	7
・事例発表	8
・クロージング	20
○ふり返し及びこれから	
・第7回大会を終えて	21
・基調講演に寄せて	23
・アンケート結果	25
・座談会	28
○参考	
・事業の実施体制	33
・運営組織・活動内容	34
・大会チラシ	35
・大会参加者	39
・実行委員会名簿	40
・歴代大会テーマ等	41
○おわりに	43

はじめに



第7回大会関東近県生涯学習・社会教育実践研究交流会は、昨年同様、新型コロナウイルス感染拡大の中での開催となりました。しかし、昨年と異なり、私たちは、新たな交流のカタチに着手した経験を持っています。したがって、昨年の経験を活かし、第1部（オンライン：オンデマンド配信）と第2部（オンライン：同時双方向通信）の2部構成をとることができました。

大会テーマは「Design to Next III つながり、拓かれる生涯学習・社会教育」となりました。コロナパンデミック後の社会への対応、また、新たな人間のつながりや他分野との積極的交流が、生涯学習・社会教育の明日をどう切り拓いていくのかとの希望を込めてのテーマ設定です。パラダイムシフトとライフシフトの二つの転換点に立ち、私たちは新たな模索を始めるべき時にあるとの認識です。

【第1部 基調講演とインタビューダイアログ：10月1日～11月30日配信】は、studio-L 代表の山崎 亮 氏と常磐大学 助教の松橋 義樹 氏にお願いいたしました。山崎氏による基調講演（テーマ「社会教育とコミュニティデザイン」）からは、コミュニティデザインの多様な実践（アート、都市空間、行政計画、地域福祉など）の基底に社会教育の模索が生かされていることを学びました。また、インタビューダイアログでは、「学びのカタチ」の検討を通して、コミュニティデザインと社会教育の意義を深めていただきました。

【第2部 事例発表等：10月16日】は、関東近県における12の事例（7県・1国立施設）の分科会交流を中心に実施されました。分科会はすべて参加者とのオンラインによる同時双方向通信で行われ、コロナ後の社会と社会教育の「今」を検討する内容となりました。特に、分科会単位で細分化する技法（ブレイクアウトルーム）も駆使され、交流の質を深めたのが特徴です。行政や市民団体等による多様な実践から多岐にわたる討議、交流が行われました。そして、クロージングは中村 麻子 氏（茨城大学社会連携センター長）からの期待を込めたあいさつで終了となりました。

参加者は662名、参加都道府県は24に及びました。全国から参加してくださった皆さんに感謝したいと思います。また、参加都道府県の増加は、本交流会の意義について、新しい交流のあり方を考える大きな示唆を与えてくれているように思います。

最後に、本大会の開催にあたり、積極的に協力してくださった関係者及び関係団体にお礼申し上げます。

AI 社会の到来を前に、私たちの社会は揺らいでいます。その答えを求めて、第8回大会の準備が待ち受けています。また、新たな一年が始まります。第8回大会でお会いしましょう。

関東近県生涯学習・社会教育実践研究交流会実行委員会
実行委員長 菊池 龍三郎（茨城大学名誉教授）

第7回大会テーマ及び開催形態

Design to Next Ⅲ

つながり、拓かれる生涯学習・社会教育

第1部 基調講演等

開催方法	オンライン（オンデマンド配信）
配信期間	令和3年10月1日（金）～11月30日（火）
演 題	「社会教育とコミュニティデザイン ～これからの時代の人のつながりとは～」
講 師	studio-L 代表 山崎 亮 氏

第2部 事例発表等

開催方法	オンライン（同時双方向通信）
開催日	令和3年10月16日（土）
日 程	12:30～オープニング 13:00～事例発表（12団体） 17:00～クロージング 17:15 終了

共催	茨城県教育委員会、茨城大学、茨城県生涯学習・社会教育研究会
主管	関東近県生涯学習・社会教育実践研究交流会実行委員会
協賛	NPO法人ひと・まちなっとわーく、NPO法人インパクト、NPO法人日本スポーツ振興協会 (公財)茨城県教育財団、(公財)日本教育公務員弘済会茨城支部
後援	福島県教育委員会、栃木県教育委員会、群馬県教育委員会、埼玉県教育委員会 千葉県教育委員会、神奈川県教育委員会、国立青少年教育振興機構 茨城県社会教育委員連絡協議会、茨城県公民館連絡協議会
協力	国立教育政策研究所、茨城県教育庁社会教育主事会

第 1 部

社会教育とコミュニティデザイン

基 調 講 演

～これからの時代の人のつながりとは～

【コミュニティデザインとは】

本日は、生涯学習・社会教育との関連で、私の専門であるコミュニティデザインのお話をします。

コミュニティデザインとは、「コミュニティをデザインする」ことではありません。「コミュニティとデザインする」という感覚に近いです。つまり、コミュニティの方々と対話を繰り返しながら、まちの未来をデザインしていくことです。



講師 studio-L
代表 山崎 亮 氏

【studio-L の由来について】

事務所の名前「studio-L」の「L」には、ライフ（人間・人生）という意味があります。

デザインは、人々の購買意欲を促したり、新しい活動を生み出したり、情報を的確に知らせたりする機能を持っています。一方で、デザインは、もともと人間のために生まれたものなのですが、その技術や素材などをこだわるのが中心になり、人間が置き去りになってしまうことがあります。

だから、戒めの意味を込めて、「studio-L」という名前にしています。

【コミュニティアートが生み出したもの】

2013 年開催の瀬戸内国際芸術祭で、香川県小豆島のアート作品制作の依頼を受けました。一人で素晴らしいものを作るのもいいけれど、地域住民みんなで一緒に作って、見に来る人も一緒に心が動くようなアート作品（コミュニティアート）にしたいと考えました。

また、制作過程で生まれた地域住民の新しいつながりは、「新しいコミュニティ」であり、アート作品だと捉えました。つまり、作品だけでなく制作過程で生まれたつながりもアート作品だと考えたのです。

【公共空間のコミュニティデザインについて】

小豆島のコミュニティアートと同様に、公園や図書館などの公共空間の設計では、住民参加型の話し合いを行い、地域住民がまちづくりの担い手になるように進めて

います。

また、行政計画の策定も専門家だけでつくるのではなく、地域住民の方々と話し合うことで、地域住民も学び、計画をもとにした行動につながっていくと思います。

その他、地域包括ケアについても同様と言えます。つまり、みんなに関係するようなプロジェクトを考えるなら、「みんなが集まって話し合い、チームを起こして活動する」というシナリオは共通しているということです。

【介護と福祉のつながりをデザインする】

介護と福祉の新しいつながりを設計した時のお話をします。

全国を8ブロック（北海道から九州ブロックまで）に分けて、それぞれ50人程度の参加者によるワークショップを行いました。介護や福祉は「大変な仕事」というイメージを払拭するためのプロジェクトでした。医療・介護・福祉関係者だけではなく、クリエイターやデザイナーなど多種多様な方々が参加することで、新しい発想やつながりが生まれました。本プロジェクトを通して、67チームが立ち上がり全国各地で活動をしています。中には、「それ介護なの？」というような斬新な活動もあり、介護と福祉のイメージの刷新に貢献しています。

【コミュニティデザインと地域づくりについて】

地域は、そこに住む人たちの人生でできています。その「人生」を微分する（細かく切る）と日々の「生活」から成り立っていることがわかります。その「生活」を微分すると、一挙手一投足の「行動」から成り立っており、さらに、その「行動」を微分すると、我々の「意識」からできていることがわかります。

逆に「意識⇒行動⇒生活⇒人生⇒地域」と積分していくことで地域づくりの意味が見えてきます。コミュニティデザインは、意識と行動を変えていくきっかけを作ることだと思っています。ワークショップの参加者同士のつながりをどう作って、どう学び合うのかを考えるのがコミュニティデザインの仕事だと思っています。

【生涯学習・社会教育とコミュニティデザイン】

私たちは「学びのプロセス」をデザインする活動をしています。そのような意味で考えるとコミュニティデザインは「生涯学習や社会教育の一環」なのではないかとも思います。「今、何が課題で、これからの日本社会はどうなっていくのか、そして、自分たちは地域社会で何ができるのか」を考えてもらうには、「どのぐらい学びたいと思ってもらえるか、学びの場をどのぐらい楽しいと思ってもらえるか」が大事になってきます。そして、学びの中で参加者同士の関係性を育むことが大切だと思っています。

インタビューダイアログ

話し手 studio-L 代表 山崎 亮 氏

聞き手 常磐大学助教 松橋 義樹 氏



山崎 氏



松橋 氏

コミュニティデザインと社会教育の関連性について

【松橋】基調講演の演題は「社会教育とコミュニティデザイン」でしたが、この二つの分野には、どのような「つながり」があるとお考えでしょうか。

【山崎】公共施設を設計する時に、地域の方々の意見を聞きながら設計するのですが、初めのうちは、なかなかよい意見を聞くことができませんでした。試行錯誤する中で、地域の方々の意見をどうデザインするかというよりも、どう学んでもらえるかということが重要なのだと気が付きました。そして、「学びのよこびをどう連鎖させていくのか」が大切だと感じた時、自分の中に、社会教育の存在がムクムクと大きくなっていきました。

防災や福祉・環境問題、まちづくりや都市計画などのデザインを住民参加で考える時は、必ず学びがなければならないと思っています。つまり、「インプットなきところにアウトプットはない」ということです。そういった意味で、社会教育はすべての分野に関係すると感じています。

一方で、役所の社会教育課は、福祉や環境を担当する部局や都市計画・商店街活性化を担当する部局とは切り離されているように見えます。多くの行政分野に社会教育の考えが入っていた方が住民参加の活動はうまくいくと思います。

「つながり」をデザインすることについて

【松橋】行政の中で、社会教育の機能（学びを通じたつながりづくり）が上手いかされていない状況は、大きな課題だと思います。山崎さんは、コミュニティデザインを通して、そこに一石を投じているように感じています。また、「学びなきところに社会的な実践はない」という指摘は、全く同感です。

それでは次の質問です。「つながり」をデザインすることの難しさや、成果についてお尋ねします。

【山崎】「つながり」をデザインすることは難しいのではないかと聞かれることが多いのですが、あまり難しいとは感じていません。コミュニティデザインを仕事としているので、私のことを、人とつながるのが好きで、コミュニケーションがうまく取れるのだろう、とポジティブに考えてくれる人が多いのですが、実際は全然違います。友達は少ないですし、人とコミュニケーションをとることもあまり好きではありません。コロナ禍において、一人であることがとても快適だと発見した程です。だから、こんな私でも参加したいと思えるにはどうしたらいいのかという考えに基づいてワークショップをデザインしています。

私は目的がないのにつながるのは、苦手です。野球やサッカーなどは、目的がはっきりしているからつながりやすいですね。しかし、つながることを目的としているような異業種交流会は最も不得意としています。

そう考えると、社会教育においても、つながるために集まるということであると、私は参加しにくいと思います。環境や福祉の課題を考えるというように、課題が明確にあり、そのテーマに興味がある人

が集まる。そして、その課題が次々に違う課題につながっていくのであれば、目的も学びも経験も高め合えるし、活動を起こしたり、チームを形成したりすることもできるということです。その結果としてのつながりなら納得できるのです。

コミュニティデザインの今後の方向性について

【松橋】「つながり」をデザインすることの本質をお話いただいたと思います。

次の質問です。コロナ禍において、コミュニティデザインは、今後どのように展開されていくのでしょうか。

【山崎】ワークショップを対面型とオンライン型に分けて考えると、オンライン型の方が参加者は多くなり、より多くの学びの機会を手に入れることができます。もちろんオンライン型にすると参加できない人（高齢者が多い）も出てきます。それならば、ワークショップ全体の流れを「参加できない人たちを参加できるようにする」デザインに変えればいいということです。

コロナ禍でオンラインを利用する方が多くなることを契機にコミュニティデザインの場を広げたいと思っています。

学び合いのあり方について

【松橋】コロナ禍でオンライン型の活動が注目されているからこそ、これを契機に新しいワークショップのあり方を考えていくというコミュニティデザインの今後の方向性をお話いただきました。

さて、最後の質問になります。コミュニティデザインには「つながりをデザインすることは、学び合いをデザインすることであり、学びの連鎖を手に入れることだ」という一貫した考えがあると思うのですが、この「学び合い」について、この交流会の参加者に示唆を与えていただければと思います。

【山崎】デザイナーとは、これまでに見たことがないものを作りたがる人たちの集合体です。だから、コロナ禍なので今までやったことのないことをしよう、アイスブレイクだってこんなやり方にしようと言って、どんどん新しいアイデアを出し、実践し、その繰り返しを楽しむという特徴を持っていると思います。この新しさや面白さは、実はひらめきでポンと生み出されるわけではありません。スタディと言って、ネタ集めのような作業をたくさん行った後で出てくる発想と言えます。

コミュニティデザインのネタはあらゆるところにあり、どこでもワークショップを行うことができます。問題は集まった人たちの目的に対する強度にあると思います。ただ学びのために集まるのではなく、自分たちが何のために集まったのか、何のためにつながろうとしているのかが理解されているとワクワクしながら学べるし、次の学びへとつながっていくのだと思います。

後は、学校教育が、偏差値を高めるとか、いい点数を取るとか、いい大学に進学するとかを目的にする教育ではなく、「学び」を嫌いにさせない教育に変わっていくことが大事だと思います。そのようになったら、社会教育はもっとやりやすくなるのではないのでしょうか。

【松橋】今回のお話で「インプットがなければアウトプットができない」、「学びのつながり」など多くの示唆をいただきました。本日はありがとうございました。

第2部

オープニング

【実行委員長（茨城大学名誉教授） 菊池 龍三郎】



今回もオンラインでの開催ですが、全国から多くの皆さまのご参加を頂き感謝致しております。

今から6年前の2015年の第1回大会で私達は、グローバル化とデジタル化、少子高齢化、都市への一極集中と地方の過疎化等により先行きへの不安が高まる中で、自助・共助・公助が最適にマッチした「持続可能な社会」をつくるために、自分達の自助と共助の力を伸ばすことが大事であることを確信したとともに、異常気象で大規模災害が多発し国土強靱化に向けた社会インフラの整備と共に私達の防災能力を高めることが急務であり、従来の社会教育・施設の役割を捉え直して対応すべき課題であると確認しました。これと同じ頃、国連ではSDGsが採択され、地球上の誰もが取り組むべき目標が設定されたことも記憶に新しいと思います。これら喫緊の課題の解決に今必要なことは、新しい社会教育での持続可能性を高める学びです。

本交流会がこれまでの活動を振り返り、今後の課題を考えるよい機会となれば幸いです。

【茨城県教育委員会教育長 小泉 元伸】



本大会は、茨城から東日本の生涯学習・社会教育のムーブメントを起こそうと、県教育委員会、大学、生涯学習・社会教育関係団体等が連携し、平成27年以降、毎年実施しているものです。

第7回大会にあたる今回は、「Design to Next III つながり、拓かれる生涯学習・社会教育」をテーマに、地域の課題を学び、解決につなげる取り組みを行っている自治体や団体等の実践発表として、オンライン上で参加者同士が交流する機会を設けております。

本大会を通じて、参加者同士が知識や技術を学び合うとともに、ネットワークをつくり、今後の実践に活かしていくことを祈念しております。

【国立教育政策研究所社会教育実践研究センター長 上田 浩士 氏】



我が国は人生100年時代を迎え、マルチステージの人生モデルに変わっていくと言われております。また、超スマート社会 Society 5.0 の到来により、新しい技術を最大限に活用し、すべての人たちが生涯にわたって主体的に学び続けることのできる環境づくりが求められております。

今回の交流会は、このような社会の潮流を受け、オンデマンド配信とオンラインによる、同時双方向型を組み合わせた新たな学びの方向性を示す実践の場となるとともに、ご自身の考えを相手に伝え、さらに参加者の多様な考え方に触れながら、新たな気づきを生み出す場にしていただきたいとご期待申し上げます。

障がい者「おうら青年学級」の生涯学習支援活動の取組
～自立した生活と余暇活動の充実を目指して～

＜発表要旨＞

邑楽町中央公民館では、不利な立場の人こそ、学習権を公民館で保障するという考えの下、平成16年度に青年学級を発足しました。知的障がい者の自立した生活や余暇活動の充実を目的とし、学級生一人ひとりが自分の目標を設定しながら、地域社会の一員として、地域の人たちとともに楽しく学んでいます。学級生は20代から50代までの軽・中度の知的障がいのある男女10人とボランティアスタッフ16人で運営しています。

発足18年目の現在、学級生たちの心が安定し、家族との会話も増えました。また、料理や洗濯、電話連絡など、その生活にも変化と成長がみられました。一人ひとりが生き生きと輝くおうら青年学級として、これからも学級生の声を基本にした活動を進めていきます。青年学級は小さな取り組みではありますが、公民館のあるべき姿を表現しているのではないかと考えています。

邑楽町教育委員会生涯学習課中央公民館
館長・社会教育主事 藤田 和良

【質疑（○参加者 ●発表者）・感想等】

（質疑）

- 15年間で参加者は変化しているのか。
- 参加者は固定していたが、2年前に2人、昨年1人増えた。
- 連携先の施設はどこか。
- この活動を立ち上げるにあたり医療関係施設や福祉施設と連携した。これらの施設職員にスタッフとして参加してもらっている。
- 障がい者の自立の成果はどんなことか。
- 電話のかけ方、料理の基本（包丁の使い方）、洗濯の仕方が身につき、できるようになった。また、気持ちが安定してきた。以前公民館の施設に入れなかった参加者が、職員と信頼関係が構築され、今では参加率100%となった。
- この事例のような取組をする際に、何からはじめたらよいか、ポイントを教えて欲しい。
- 日頃から地域に向けてアンテナを高くしておくことが大切である。福祉部局や障がい者施設の方との交流をすること、雑談から必要なことが見えてくることもある。

（感想）

- ・発足から15年という取組に感銘を受けました。住民によるボランティアスタッフという組織ができているからこそ、地域の方同士のつながりによってこそだと思いました。
- ・青年学級のみなさんが学ぶだけでなく、その先には自立を目指しているということで誰一人取り残されることがないように、ともに今を生きる我々は考えなければならないと感じました。
- ・現代の共生社会において大切な取組の1つだと感じました。特に、医療関係施設や福祉施設と連携して公民館が中心となって取り組んでいる点が意義のあるところだと感じました。



調理実習(パン・サラダ・プリン)



119番通報の訓練をする学級生

「ちくせい若者まちづくり会議」の取組

<発表要旨>

この事業は、学生のたまり場・遊び場・学び場を創りたいとの思いから立ち上げを検討し、令和2年度からスタートしました。

初年度には、市内を巡るフィールドワークや市民との交流会等を通じ、学生の目線で発見した市の魅力をSNSで発信するほか、学生自らが企画・実行をする「マイプロジェクト（街の賑わいを作り出すための提言など）」を作成しました。2年目となる令和3年度は、そのプロジェクトの実現性の検証や実施計画書を作成し、実施に向け準備を進めています。

市としては、学生の主体性や自発性を重視し、学生主役の伴走的な支援を行い、若者による地域づくりを推進しています。＜参加人数：令和2年度27名、令和3年度29名＞

筑西市人口対策部人口対策課 主任 水越 宣貴
主事 倉持 朋奈

【質疑（○参加者 ●発表者）・感想等】

（質疑）

- 初年度に学生が27名も集まったが、どのようにして集めたか。
- 近隣の大学等へポスター掲示などの協力を依頼した。他にも市内飲食店やコンビニへの掲示、SNSを活用した。コンビニや飲食店のポスターを見て参加を決めた参加者も存在した。
- 筑西市に来てくれる理由を市としてどのようにとらえているか。
- 「住みやすい街」。また、都市部からほど良い距離にあり、田園風景のなか真岡鉄道SLなど鉄道3線が走る。他にも、食べものが美味しく、歴史・文化資源を備えた魅力あるまちである。
- 2年目に継続できなかった参加者の理由は何か。
- 学生対象なので、就職や就職活動のため継続できないのがほとんど。OB・OGについては、その後の対応も検討している。
- 学生が参加した動機が知りたい。
- 様々な理由がある。筑西市をもっと知りたい、まちづくりをやってみたい、自分を試してみたい、今後の就職活動に有利になる、行政が行っている安心感があるなどである。
- 参加者を「学生」にしぼった意図は何か。
- まだ知り得ていない筑西市の魅力を社会に出る前に感じてもらうことで、郷土愛の醸成につなげていきたいという考えから。

（感想）

- ・内閣府の調査で、「私が関わることで社会が変わる」と感じている若者は諸外国と比べて低く、その中で、若者が社会形成に参画する体験の場を作るとはとても大切だと感じました。
- ・それぞれのグループによるプロジェクトは、フィールドワークを通して地域の魅力や課題を発見し、様々な手法で課題を解決しようとするものでした。若者の人材育成やつながりづくり、そして若者による若者が主体となった地域づくりを実現していると感じました。



第1回交付式での集合写真



現地調査のようす

つながる ひろがる NAMEGATA の未来

～『どれみ』から始まった子育てサークルのあゆみ～

<発表要旨>

持続可能な地域を作っていくためには、様々な手法があります。今回は、その中で私たちが取り組んできた事例を発表しました。

行方市の保健福祉部健康増進課主催の講座に参加し、そこで生まれた母親たちのつながりを生かして、子育てサークルを結成しました。そこでは、母親たちの思いや願いを形にして、「みんなが楽しいこと」「子育てにプラスになること」に取り組んできました。

活動を通して、市の他部局とのつながりや NPO 等とのつながりもできました。これからも、私たちの活動を進めながら、笑顔あふれる住みよい地域づくりを目指していきたいと思っています。

ママスマイル行方 代表 羽鳥 悦子 他

【質疑（○参加者 ●発表者）・感想等】

（質疑）

○市の戦略プロジェクトで、ニーズに合わせながら機能して発展していったことが素晴らしい。今回は母親対象のものだが、ひとり親（父親）を支える仕組みはどうなっているのか。

●今回は、母親を対象とした講座がきっかけだったので、母親を中心とした地域の子育てについて発表した。父親を対象とした講座がさらに増えると、それらがきっかけとなり、父親が中心となる地域の子育てがさらに発展するのではないかと思う。

活動は、サークルメンバーのみから、サークル外の市民ママに声をかけるものへと発展してきた。今後の展望として、さらに多くの子育て中の人と広域でつながり、みんなでこの地域での子育てを楽しんでいきたい、つながりを広げていきたいと考えている。

我々が地域で生きていくには、暮らしを支える行政のはたらきが必要不可欠。しかし、行政「だけ」ではなく、それ以外にも多種多様な方法、手段がある。必ず心を開いて話せる仲間が見つかるし、人と関わることで、お互い学び合って、より良い地域づくりにつながっていくものと思う。

（感想）

- ・「ママスマイル」に生涯学習課も関わりたいと思いました。行方市では訪問型家庭教育支援も行っているのので、家庭教育でのつながりを大切にして、本市で子育てをしたい親を増やしたいです。
- ・行政として、協力の体制づくりが必要だと思いました。コロナ禍でどう家庭に届けるか、どういう手立てがあるのかと考えたときに、情報誌、パンフレットを届けるのも有効だと考えました。
- ・参加者との横のつながりがつくりやすいと思いました。挨拶だけだったのが、家庭教育学級を通して、「昨日はありがとうございました。お子さんはどうですか」など会話ができる関係になると、困った時に相談できる関係ができて、不安や悩みの解消になるとと思いました。



講座での集合写真



サークル活動の写真

働き盛り世代を対象とした早朝教養講座「宮の朝活」の取組

<発表要旨>

宇都宮市では、「学び」を通じた人づくりを更に推進するため、生涯学習講座への働き盛り世代の取り込みを目指し、出勤前の時間を活用した無料の早朝教養講座「宮の朝活」を開催しています。実施にあたっては、大学生や20～40代の世代に対し、より「魅力的な学び」を提供できるよう、受講者ニーズに寄り添いながら、講座の展開手法等を工夫しています。講座をきっかけに受講者同士が繋がり、講座終了後も自主的に市のイベントに参画したり、交流を通して一緒に余暇活動に取り組んだりするなど、新たな活動が生まれています。

平成25年度にスタートした「宮の朝活」。現在9年目を迎え、第17弾目を実施中です。

宇都宮市教育委員会事務局生涯学習課
係長 藤田 直樹

【質疑（○参加者 ●発表者）・感想等】

（質疑）

- 広報の方法について、どのように取り組んだのか。
- 生涯学習センターや図書館等の社会教育施設でのチラシの配布や、ホームページ上での周知など。新聞等に掲載されたことが集客に大きく寄与した。
- 企画委員を選考するにあたり、留意した点はどのようなことか。
- 毎回、休まずに参加している方や鋭い視点で質問をしている方などに直接声掛けをした。年代のバランス（20～40代）や性別も考慮し構成している。
- 運営するにあたっての予算（謝金）や受講料は？
- 講師謝金は、市の基準に従い決定している。受講料は無料である。
- コロナ禍での活動はどのように実施しているのか。また対策はどのように行っているのか。
- 前期は中止を余儀なくされた。後期は消毒や検温、三密回避など、感染症対策を十分に講じた上で活動を再開している。オンラインでの開催が今後の課題である。
- 交通の便が良くない場所での開催はどのように対応すればよいか。
- 早朝であれば、施設の駐車場は空いている場合が多いので、車でも対応可能ではないか。

（感想）

- ・継続・発展しながら事業が展開されていました。受講者との協働企画で自分たちの活動となっていると感じました。ぜひ参考にしたいです。
- ・すぐにでも参加してみたいと思える取り組みに引き込まれました。受講者参画型という仕組みは、他事業でも生かせるし、講座を受けるだけでなく、意欲ある方々の意見を生かすことで、さらに意欲が増し、自分たちで作り上げているという喜びも手に入れることができると感じました。

交流タイム(名刺交換)の様子



グループワークの様子



「シビックテック団体との協業事例からみる地域活性化の可能性」

<発表要旨>

シビック（市民）テック（テクノロジー）は、ともに考えともにつくるという思想のもと市民自身がテクノロジーを活用して地域課題等を解決する活動のことを指します。日本のシビックテック活動は世界の中でも盛んであり、各地で連携の事例が出てきています。一例として、コロナ対策サイト、ウィキペディアタウン、子ども未来ラボ、テイクアウトマップなどがあります。シビックテック活動の人材育成や、共業（共に業する）取り組みを推進することで、持続的な地域の課題解決の場ができ、学びの循環が生まれることを期待しています。

Civic Tech Zen Chiba/Code for NAGAREYAMA

代表 白澤 美幸

【質疑（○参加者 ●発表者）・感想等】

（質疑）

- 全国的な団体か。また、活動のきっかけは何か。
- 全国に150~160団体ある。きっかけは子育て中の時期でも物や時間、場所の制約がなく活動できるから。
- 行政（生涯学習・社会教育分野）と連携した取組を紹介してほしい。
- 行政との連携はあまりないが、プログラミング教育は連携している。他は別物とされやすい。
- シビックテックの取組を地域へどのように落とし込み、定着につなげていくとよいか。
- 多くのシビックテック活動は、地域の課題が明らかになることで存在する。行政の課題をまず、市民にわかりやすく伝えること。実施した前例としては、課題解決アイデアソンなどがある。その上で、市民が自発的に行動を起こしやすくする仕組みを作る。先進的な自治体では始まりつつあるが、活動に必要な資源を用意することが重要。具体的には、データの公開やオンラインでの活動推進など。ここでは施設利用頻度や、団体発足数などをKPIとして決めないことを勧める。
- シビックテックの活動を進める上での課題は何か。
- 市民活動だと認知されにくい。Wi-Fiなど施設のインフラがネックで公共施設を活用できない。サブスクリプションの料金に対し、助成がおりない場合がある。課題解決というコンサルのような活動のため、何が目的なのかと行政に勘ぐられる。オンラインなど地域を超えた人材が集まってくる場合（関係人口など）市民の活動だと認知されない。

（感想）

- ・今回の発表はテクノロジーを住民の主体的な参加のきっかけづくりとして活用されたまさに新しい地域づくりの事例として素晴らしい取組でした。
- ・学びと活動の好循環を、テクノロジーを通して作り出す、新たな時代の社会教育の姿を見せていただきました。シビックテック活動と社会教育の親和性や可能性を感じることができました。



台風被害を超えてわかった、自分のできる復興支援としてのウィキペディアタウン(千葉県館山市)



子ども未来ラボ(千葉県流山市)

映像作品を公開講座として提供する

「多文化理解パートナー育成講座 ～茨城の多文化共生を考える～」の実践から

<発表要旨>

本発表では、茨城県内で在留外国人への支援や交流活動をする団体の代表者及び参加者を対象に行ったインタビューを90分の動画にまとめ、その動画を茨城大学リカレント教育プログラムの公開講座として配信した実践を報告しました。実践からは、自分たちの言葉で話しかけることにより視聴者からの共感が得られやすい、自分たちの実践をふりかえり、それを仲間と共有することができるというメリットが確認されました。なお、公開講座で使用した動画の一部は下記のリンクから視聴することができます。また、リンク先の動画では本活動の意義についても議論されています。

<https://youtu.be/xfnjtCobL4M>

茨城大学全学教育機構国際教育部門

准教授 瀬尾 匡輝

【質疑（○参加者 ●発表者）・感想等】

（質疑）

○より内容のあるビデオを作成するうえで、量が必要だと思うが、量を集めるにあたって、注意していかなければならないことは何か。

●実際取ったデータはすごく多い。運営者の方には、2時間ぐらい。参加者も4～5名出てくるが30分ぐらいかかっている。そこから編集していくので、かなりカットしている。そうしないと、予定調和みたいな話になる。準備したものを語ってもらうと画一的になってしまい、リアリティが消えていく。私はたくさんインタビューをして、写真や映像を多く提供してもらっているので、付け足していく（編集する）のが楽だった。

会議の資料、文章では誰も振り向いてくれない。映像で見せると、「こんな素晴らしいことをやっていたんだ。」と言われることがある。今はAIの発達が進んでいるので、動画を集めると勝手に選んで映像作品にしてくれるサービスもある。それを活用していくともっと楽になり良いと思う。

○グループの話し合いで議論になったのだが、参加人数が多いが、どのように広報すれば集まるのか。どのように周知したのか。

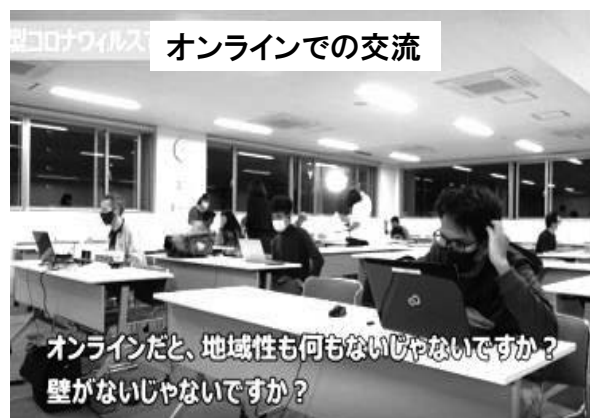
●茨城大学社会連携センターから、多くの市町村や公民館にチラシを配布してくれた。県立高校へもメールを送った。

○どのようにつながりを広げたのか。

●人伝いで広がった。まず、個人（団体）からいろいろなところへ。そこからつながりが生まれている。やはり、人と人のつながり、関係性が大切。

（感想）

・活動がさらに大きく発展していく可能性を感じました。受け入れの裾野をどう広げていくかが課題かと思います。（県内への広がり）



コロナ禍における青少年教育研究センターの取り組み

<発表要旨>

国立青少年教育振興機構青少年教育研究センターでは、新型コロナウイルス感染症の流行を受け、様々な取り組みを行っています。

まず、調査の実施により、全国の青少年教育施設や、国立施設を利用した小・中学校の、コロナ禍の現状把握を行いました。次に、上記の調査結果や、各施設や団体における課題や取り組みを共有し、広くつながりを作ることを目指して、オンラインフォーラムを開催しました。さらに、これらのアーカイブや調査結果を YouTube チャンネルで配信することで、いつでも、だれでも視聴できるコンテンツとして発信しています。

今後も、調査研究から得られた知見を現場や社会に役立てていただけるよう、より一層の普及啓発に努めていきます。

国立青少年教育振興機構青少年教育研究センター
企画室 総務係員 大西 広海

【質疑（○参加者 ●発表者）・感想等】

（質疑）

○調査・研究においてコロナ禍における青少年教育施設の特徴的な事例があれば教えて欲しい。

●オンラインやアウトリーチ型の事例がある。出前授業プログラムで地域の学校に体験を届ける取組が見られた。

○オンライン（Zoom など）で活発に行われた取り組みなどがあれば、紹介いただけないか。

●事例発表で紹介させていただいたオンラインフォーラム（YouTube ライブ）では、Zoom やスグキク（匿名でコメントを投稿できる）を活用し、視聴者からの感想や質問に答えながら、双方向の形式で実施した。当日の映像は、YouTube チャンネルよりご覧いただける。

<https://www.youtube.com/channel/UCsfCbGMu2WZYc5kCxtprN0g>

（感想）

- ・コロナ禍で体験活動（学習）ができない状況では、今後どのような影響があるか不安です。そこで、「今」に照準をあて、オンラインを活用し、学校や家庭に「体験を届ける」ことを考えながら取り組んでいるのでとても参考になりました。とはいえ、リアルで体験するからこそその価値があるので、コロナが終息し子どもたちに体験を届けたいですね。
- ・どんな子どもの姿をねらいとするかで、オンラインで効果があるもの、直接体験でしかねらいを達成できないものそれぞれあると思います。ねらいをしっかりとって、できることを考えていくことが、子どもたちの体験や学びを止めない上で大切なことだと改めて感じました。
- ・学校現場では、様々な行事を通した体験活動が中止となっているが、そんな中でもできる方法を子どもたちが考え、新たな方法を作り出すことも大切な学びであると思いました。



「はなわ探検隊！特産のダリアでふくしまの元気をPR！」

～チャレンジ！子どもがふみだす体験活動応援事業の活用～

＜発表要旨＞

塙町青少年育成町民会議では、町内2つの小学校の1～6年生の児童を対象に、自然体験・異世代交流・郷土学習などの体験学習講座として、「はなわ探検隊」を組織し、年10回程度の活動を実施しております。

今回ご紹介します事業は、はなわ探検隊の活動の一環として行い、塙町特産のダリアを児童の探検隊が撮影し、その写真をポストカードにして、県内外でPRしたという活動の事例となります。

福島県の補助事業を活用し、「ふくしまの今を発信」し、県内外で被災地の現状などについて伝え、郷土や地元福島の特産品への理解を深めることを目標に活動を行いました。

塙町教育委員会生涯学習課 主任主事 松本 静香

塙町教育委員会学校教育課 主査 中畑 哲

【質疑（○参加者 ●発表者）・感想等】

（質疑）

○高校生ボランティアはどのようにして集めているのか。

●近隣の高校に依頼して、希望者を募っており、3年間参加してくれる人もいます。町の子が友達を誘っていることもあるし、他市に進学した塙町の子も参加している。

○毎年、どのような活動をしているのか。

●補助金を使って年10回程度の活動に取り組んでいる。老人会との交流や料理教室、自然観察、美術展の見学など様々な活動をしている。遠足として、栃木県や茨城県に行くが、毎年同じ活動にならないように配慮している。

（感想）

- ・とても参考になりました。長い期間行われており、熱意を感じる取組です。高校生ボランティアの継続がとても素敵に思えます。小学生のときに参加した子が、高校生になってボランティアとして戻ってくることから、子どもたちにとっても楽しい活動であったとわかりました。渡した絵はがきをきっかけに塙町に来てもらうとか、返事をもらえるようにすると、子どもたちも嬉しくなってさらにやる気が出るのではないかと思います。
- ・小学生の様々な体験活動を通して、子供たちの成長につながる取組だったと思いました。また、体験活動ボランティアの高校生にとっても、ボランティアを通して充実感や成長を感じとれた活動だったのではないのでしょうか。絵はがき作りで終わるのではなく、写真撮影のノウハウ、展示やPR、いろいろな大人と交流する場づくりなどを通して、ひとづくり、つながりづくり、そして地域づくりにつながる取組だと思いました。



現地調査の様子



探検隊集合写真

「地域を補う」～折橋地域活性化 PT の活動紹介と問題点～

<発表要旨>

設立～6年間の活動状況を説明しました。協力隊等の応援を受けた初期の盛り上げを過ぎながらも、地元独自での活動を継続している事は評価できると考えます。現時点で自己評価し、それらをベースにした今後の取組方向を決めました。地区外との交流事業は安定的に継続しており、これを基本活動とします。加えて地元については、少ない住民数の割には多すぎる公・準公的縦割り事業に対し、自由の利かないもの、高齢化等で出来なくなったものの受皿、開始に時間を要するもの等を縁の下で支援し、地域を補う活動を目標とします。本発表会では、行政との関わりについてのご質問が多くありました。このご期待も意識し今後の検討項目として行きます。

折橋地域活性化プロジェクトチーム (PT) 代表 助川 仁一
副代表 菊池 竹一

【質疑 (○参加者 ●発表者)・感想等】

(質疑)

○年間を通して行われているイベントのアイデアは誰がだしているのか。

●アイデアは思いつきである。今日の発表は5年分ある。地域の行事からスタートし、その中で参加者から発想をいただいた。蔵の中で蕎麦打ち体験をしたところ、ポスター(滝の写真)を見て、山歩きや山菜採りを計画するなどである。蔵の中でのジャズ演奏も、訪問者からの「ここで演奏会ができればいいね」という発言から生まれた。みんなから知恵やヒントをもらっている。

○行政等からの支援等があると思うが、つながりはこういった形なのか。

●行政とのつながりは、正直難しいところだが、関わりたい面とそうでない面がある、というのが本音である。行政が関わることで様々な制約も出てくるからである。私たちは地域の老人なので自由に遊んでいたいし、人との関わりは広げて増やしていきたい。市の生涯学習センターで「夢塾」を開いているが、それは継続していきたい。

○コミュニティ・スクールが全国的に推進されている中で、学校との連携をどう考えているのか。

●まだ考えていないが、支援できるものや教えられるものがあれば、つながりをもっていきたい。

○地域おこし協力隊との連携はどうか。

●地域おこし協力隊は、起業しなさいという命題が与えられる。折橋地域活性化 PT のスタートは「地域を活性化しましょう」ということで始めた。対象が年配者向けで、若い人といっても子供連れの家族向けになっている。若い人が増えればよいと思っている。

(感想)

・少子・高齢化をどうしていくのかを考えると行政の協力が必要だと思います。また、継続していくためには後継者の育成も必要となるでしょう。



地域のたからである子どもたちへの学習支援を通してみんなの居場所をつくる

＜発表要旨＞

私たちは高校生・大学生、元塾の講師など教育関係者からなる、学習を中心とした居場所を作る団体です。初めに対象としたのは、授業におくれる児童でしたが、やがて全ての児童を対象に学習会をしました。そこでは先生と子どもが作る縦の関係でも、友達同士で作る横の関係でもない、斜めの関係を目指しました。中には学校の先生が教えるのと同じように角度の強い講師を必要とする児童がいます。他方友達関係に近い角度の緩い講師を必要とする児童がいます。彼らにとっていい場所であるために、いろんな子どもがいるからいろんな講師が必要なのです。子どもから「先生ありがとう」という言葉をもらい社会復帰をしたボランティアさんも少なくありません。

NPO 法人こども応援丸

理事長 津田 眞利

【質疑（○参加者 ●発表者）・感想等】

（質疑）

○Zoom を活用した取り組みがあれば教えていただきたい。

●コロナ禍では必要性があるが、一対一の対応が大切であると考えている。子供たちには、対面でのぬくもりや温かい経験をしてほしいと考えている。コロナの感染症拡大の状況によるが、11月からは対面で再開できる予定である。なお、ボランティアの方々は、ワクチン2回接種済みであることとしている。また、学校内で感染者が出た場合には、中止することになっている。

○講師の登録者数は、何名くらいいるのか。

●現在の登録者数は、100名以上。大学生やシルバーの方、退職された方などであり、自身の経験を生かして講師となっている。

○不登校の子どもたちへの学習支援はあるのか。

●（どの子かはわからないが）何名かは不登校の児童生徒がいると思われる。「学校には行けないが、ここは楽しい」と言って来ている子どももいるが、みな同じように接している。子どもたちの「わかる」というところに、一緒にいられることが嬉しい。

（感想）

- ・斜めの関係は、昔ながらの地域の方と子供の関係であると思いました。
- ・社会教育の温かさや柔らかさを実践から感じる事ができました。
- ・安全な居場所があり、安心して学べることで、子どもたちは気持ちも安定するのだらうと感じました。子どもたちを地域で育てていくことで、地域の大人たちもつながり、地域の方々で作り上げる社会の構図が参考になりました。



対面での学習支援の様子①



対面での学習支援の様子②

地域と連携・協働した教育の推進

「おがわ学の実践・構築」学校と地域の未来を創ろう！プロジェクトの取組

<発表要旨>

「おがわ学」の取組では、小川町立小・中学校及び埼玉県立小川高等学校の児童生徒が、小川町の歴史や文化、産業等を学んだり、地域活動への参画をしたりしています。この学びをとおして児童生徒が小川町への愛着や誇りを持ち、地域課題の解決に取り組む能力を身につけることを目指しています。

これを実現していくため、学校と地域が連携・協働するコンソーシアム体制を構築し取り組んでいます。また、この取組では、「おがわ学」に関わる大人自身の学びにつながることも期待しています。

今後は、より連携・協働を深め、持続可能で魅力ある「おがわ学」を目指していきます。

埼玉県教育局市町村支援部生涯学習推進課

指導主事 岡本 敏明

【質疑（○参加者 ●発表者）・感想等】

（質疑）

- 「おがわ学」を始めたきっかけは何か。
- 以前から町や教育委員会、高校は町の将来について危機感を持っていた。そこへH30年埼玉県に地域連携担当が設置され、「WIN-WIN プロジェクト」事業に参加することを決めた。
- コーディネーターは組織の中にいるのか、どのような方が務めているのか。
- 今年のコーディネーターは社会教育主事の資格を有する元校長先生（昨年度は社会人経験のある大学院生）。来年度は予算の関係でコーディネーターをつけられるかは未定である。
- 「おがわ学」の有効であったテーマを知りたい
- 歴史ある文化・産業資源である「和紙」「有機野菜」は有効であった。「外国人観光客倍増作戦」は魅力的だがコロナの影響でできていない。
- 話し合い後に学校の教育課程においてスタートするのはいつなのか（次の年？）
- 6月に第1回会議。1年目はトライアルとして取り組んでくれる先生からスタートし、2年目以降は反省を生かしてブラッシュアップしている。

（感想）

- ・成功ではなく挑戦（チャレンジ）という運営側の考え方は、参加する地域の方にとって、失敗してもチャレンジすれば良いということで、伸び伸びと楽しんで取り組めるのではないかと感じました。実践、リフレクション、改良という流れの中で、子供も地域の大人も共に成長する、学びと活動の好循環が実践された素晴らしい取組でした。
- ・目指す児童生徒の姿を検討し、設定されていましたが、ここに「どのような人になりたいか」という子どもの声を反映させると、さらに良いものができるのではないかと感じました。



小学生の学び



和紙作り

かすみがうら市リーダース高校生会の取組

<発表要旨>

かすみがうら市リーダース高校生会は、

- ・誰かに言われたからではなく、自らが考え、周囲の助言を受け入れつつ、自主的に活動する。
- ・各種生涯学習、子ども会関連事業等に参加し、学校や家庭では体験できない様々な体験・研修によって自分のスキルを高める。
- ・異なる高校や学年の会員同士で協力して事業を行うとともに、他市町村の高校生会との交流等を通して、人間関係調整能力を獲得する。
- ・市や地域のイベント等に参加することにより、幅広い世代の人と交流し、地域社会の一員として社会生活への見通しをもつ。

以上を目標として、日々活動しています。

かすみがうら市教育委員会生涯学習課
主任主査兼社会教育主事 齋藤 英明

【質疑（○参加者 ●発表者）・感想等】

（質疑）

○高校生会のリーダーシップや体験は大切であると感じている。H27年度に復活したとあったが、一度やめて復活したその経緯は何か。

●詳細はわからないが、高校生の年代の活動は大切で、当時の担当が必要と感じていた。市内の高校へ説明しに行き、理解を得ていった。私も担当していて「高校生会の力」は感じている。

○活動回数が多いが、年間どのくらいあって、行政との打ち合わせなどをどうしているのか。

●コロナになって活動は減っている。毎月定例会（主に土日）があるほか、会員の都合が合う時や、活動の依頼があれば月に2、3回程度集まって打合せをしている。会員同士はラインでつながっているため、そこでも情報共有をしている。R元年度の活動が一番多かった。

○子ども会からの依頼については、企画からすべておこなっているのか、またはボランティアとしてお手伝い程度なのか。

●子ども会がどの程度の活動内容で何を求めているかによる。数時間のレクリエーションと一緒に活動してほしいという協力依頼がある。「企画から全て任せる」という依頼はあまりない。単位子ども会ではなく市子ども会とつながりがあるので、市の事業の手伝いに出かけることもある。

○高校生会に関わる市の担当職員は何人ぐらいなのか。

●高校生会の担当は自分（社会教育主事）1人である。課内で情報を共有して、必要に応じて手を借りている。課の人数が減ってしまったので、自分でできる限りのことはやっている。

（感想）

- ・本市も高校生会の活動を実施しているので、参考にしたいです。
- ・コロナなどで様々な制約を受ける中、高校生会のモチベーションを保つのが難しいと思います。成人式の手伝いは良い経験であり、新成人・高校生にとって思い出に残ると思います。



イベントの準備



リーダース高校生会

【同時双方向性のオンライン開催の意義】

大会開催にあたりご協力いただいた各県教育委員会や団体様に心から御礼申し上げます。

さて、本交流会は新型コロナウイルス感染症の影響から、今年度もオンラインでの開催となりました。face to face での交流がなかったことは残念ではありましたが、現地に行かなくても参加できるということで、全国各地（24 都道府県参加）より多くの方々に参加いただけたことはよかったと思います。



【新型コロナウイルス感染症を経験して】

今回の事例発表では、コロナ禍の難しい環境の中でオンラインを活用しながら学びを継続している、という内容の事例が多く見られたことは非常に心強いな、と感じました。新型コロナウイルス感染症を経験したあとの時代の学びは必ず変化していくはずです。逆に変えていかなければならないと思っています。特に生涯学習や社会教育という「生涯を通じた学び」はオンライン等を活用してどんどん変わっていく必要があると思っています。

【学びの深化を考える】

「Digital Transformation(DX)※」という言葉が浸透してきました。DX とはただオンラインを使えるということではありません。また、パソコンが使えるようになった、ビデオカメラが使えるようになった、などのインフラが整備できたということがゴールではありません。

DX とは本来、それらをツールとして活用することです。そして一番の目的は、「それを使ってどんな学びができるだろう。」「これしかできない学びって何だろう。」と考えることによる、学びの深化です。

現段階では、まだオンラインでの研修もツールとしてしか使用できていないのが現状です。「オンラインでしかできない学びとは何なのか。」を皆様と一緒に考えていきたいと思っています。

【最後に】

今回のテーマ「Design to Next Ⅲ」いわゆる「次の時代の学びって何だろう。」ということを今後、皆様と考えながら創出できることを期待するとともに来年も皆さまと再会できることを楽しみにしています。

※ 進化したデジタル技術を浸透させることで人々の生活をより良いものへと変革すること。

第7回大会を終えて

～実行委員から～

昨年の第6回関東近県生涯学習・社会教育実践研究交流会は、初めて実行委員という立場で関わらせていただいた大会でした。新型コロナウイルス感染症が猛威をふるう中、対面での実施はできませんでしたが、第1部の基調講演、第2部の本大会ともに、オンデマンド配信という形での開催となりました。未だかつて経験したことのないような緊急事態のなかにあっても、「学びを止めない」という熱い想いに感銘を受けました。第7回関東近県生涯学習・社会教育実践研究交流会においても、コロナ禍での開催となりましたが、前回のよさを踏襲しつつ、さらにパワーアップし、オンデマンド配信と同時双方向通信を組み合わせた形での開催となりました。参加者同士が交流できる場の重要性を改めて感じることができました。いかなる状況においても「学びを止めない」。社会教育に携わる立場として、その視点を常に意識することの大切さを再認識することができました。

国立教育政策研究所社会教育実践研究センター 専門調査員 菅谷 政之

「社会教育の学びを止めない」、「社会教育でつながる」、「社会教育で拓く」。まさしく、今年度の第7回大会はその実践がされていた大会だったように感じました。

この開催において感じたことは、これからの時代、対面でもオンラインでも、新しい生活様式を踏まえた「学習の仕方」や「無駄を省いた事業実践」が必要になってくるということです。社会教育を進める中で、課題であるファシリテーターとしての社会教育主事（社会教育士）の役割や存在が大きくなる一方、全国でも本県でも、発令数が伸びない又は減少していく現状があります。

本県においては、平成30年度から、各学校に「地域連携担当教職員」を配置しています。その担当も「社会教育主事」が担っていくことが今後の大きな目標であり、更には、若い世代の未来への基盤づくりとして、社会教育の重要性を伝えていくことを大切にしていきたいと考えています。

福島県教育庁社会教育課 主任社会教育主事 石井 智明

県外実行委員として関わらせていただき本大会で3回目となるが、実行委員とは名ばかりで今回も一人の参加者として多くのことを学ばせていただいた。これまでの3回を振り返ると「Design to Next」というテーマを継承しつつ、コロナ禍の中で、新しい社会教育の手法や考え方を模索しながら着実に進化を遂げてきた。今回の事例発表では、テーマや方法、内容等は異なるものの、どの実践も学びを通じた人づくり、地域づくり、つながりづくりに向けた取組として実践を積み重ねていることに感銘を受けた。また、基調講演を拝聴し、改めて学びのプロセスが大切であり、学ぶ喜びを連鎖させることが生涯学習・社会教育の重要な役割であることを学んだ。共通の課題（テーマ）に対して興味がある人が集まり、一緒に学び合うことで自然とつながりが生まれるという一連のプロセスをいかに仕掛けていくかが、生涯学習・社会教育の醍醐味であることを再認識した。

群馬県教育委員会事務局生涯学習課 社会教育主事 知久 鉄平

埼玉県として実行委員会に参加しましたが、様々な県の生涯学習に携わる方々と会議等で交流でき、とても勉強になりました。

さて、今年度も、「新型コロナウイルスの感染拡大」にともない、社会教育にとって一番大切な「人と人とのつながり」を築いていくことが難しく、困難な状況が続いております。第7回大会 関東近県生涯学習・社会教育実践研究交流会が、オンラインを通して、学びを止めない工夫をしながら開催されたことに感銘を受けました。埼玉県でも、外国人親子への支援事業を進めておりますが、コロナ禍の下試行錯誤しながら行っています。

「誰ひとり取り残さない社会の実現」のため、創意工夫しながら事業を続けていく重要性を今大会の発表事例等を通して改めて実感することができました。

今後大会の運営等に携わらせて頂きながら、多くのことを学んでいきたいと思っております。

埼玉県教育局市町村支援部生涯学習推進課 社会教育主事兼指導主事 阿佐見 直昭

「社会教育は楽しい、そして奥深い。」

基調講演と4つの事例発表、協議をとおして感じた感想です。

コロナ禍で人と人とのつながりに制限がかかる中でも、県外で行ったダイナミックな体験活動、働き盛り世代を対象とした朝7時から行われる活動など、刺激的な事例発表の数々でした。コロナ禍で行われている事例なのだろうかと思心しながらも、主催者の工夫や努力が積み上げられている事例をとおして、私自身も明日から「何ができるだろう」、「どんなことに取組めるだろうかと、とても前向きな気持ちになることができました。

また、画面越しでも参加者の方の熱い思いを感じ、多くの学びを得ることができました。神奈川県内でもコロナ禍ではありますが、学びの場を創出・工夫したり、人と人をつなげたりする機会が設けられるよう努めていきたいと、自分の職責について見つめ直すことができた1日になりました。

神奈川県教育委員会教育局生涯学習部生涯学習課 副主幹兼社会教育主事 永野 文

～大学生から～

私自身、卒業論文で地域全体での防災教育および防災活動についての研究を行っており、大学卒業後は福祉に関わる職業に就くため、大変興味深く今回のインタビューを拝見しました。インタビューの中で山崎さんが「こんな私でも参加したくなるようなワークショップとはどのようなものかを意識した」とおっしゃっていて、それは地域住民にとって参加すること自体の敷居が低くなり、親しみが持てるからこそ人々が集まりやすくなり、そこにつながりが生まれているのだな、と改めてコミュニティデザインや生涯学習、社会教育に携わる側も地域住民の一人として地域の方々に近い存在として関わることが大切なのだなと感じました。

常磐大学人間科学部教育学科 4年 小沼 奈那子

まず、第一部と第二部を通して、各地域で実践されている生涯学習・社会教育の事例を具体的に知る機会をいただけたので、とても勉強になりました。

とくに、第一部においては、コミュニティデザインを行う上で「共通の目的」をもつことの意義について再確認するとともに、「共通の目的」をもつことができれば、その目的を達成する上で発生した課題を参加した人々のつながりを用いることによって解決できるなど、その有用性についても理解することができました。一方で、「共通の目的」をもっていたとしてもつながる手段において課題を抱えていては、それをもつことの意味がなくなってしまうと考えたため、デザインする側は「つながる手段」となることが重要だと感じました。

常磐大学人間科学部教育学科 3年 奥谷 友美

第7回大会基調講演『社会教育とコミュニティデザイン』に寄せて

第二次大戦後、私たちの国土は焦土と化し、国民の心も漂泊した

焼け野原から、私たちは次代の日本をデザインせざるを得なかった

目的は、民主主義

公民館は、戦後社会形成の中で「民主主義の学校」と呼ばれた

それは、民主主義社会をコミュニティデザインする空間であつたに違いない

そして、今になって、そこで、民主主義を担う国民のワークショップが行われたのだと納得する

戦前の残滓を乗り越え、新しい社会をデザインするべく、社会教育は先頭を切った

先人の格闘を、今日、私たちは山崎講演の中から呼び起こされたようだ

そう、住民との「夜を徹しての議論」こそ、ワークショップだった

民主主義のためのネタ集めに奔走し、次の社会を夢見る力を蓄えた

村おこし、まちづくり、新生活、生活の科学化……

社会教育は、多様な課題を結節し総合化のプラットフォームになった

やがて、歴史は「高度成長」の時代へと幕進する

「大量生産—大量消費社会」でのコミュニティデザインが急務となった

社会教育は、過疎・過密の最前線に立ちながら格闘し続けた

課題の内容も、解決手法も様変わりしてきた

社会教育団体も多様に分化し、それぞれの課題解決に特化していった

「学びの連鎖」は「学びの拡散」となり、求心力の不透明感が始まる

それでも、歴史的課題の前面に立ち続けた熱い思いを山崎講演に確信する

今、日本はパラダイムシフトとライフシフトの真っ只中にある

課題にどう立ち向かえばいいのか、姿勢を正すことは可能なのか

コミュニティデザインは、社会教育の真価をあらためて教えてくれた

「第二の分水嶺」は20世紀末にすでに唱えられている

私たちは、ネタ集めと感受性を磨き続けなければなるまい

もう一度、「学びのカタチ」を取り戻し、「学びの楽しさ」を手に入れようと思う

多くの学問分野の底に、社会教育の思想と実践を見つけなければなるまい

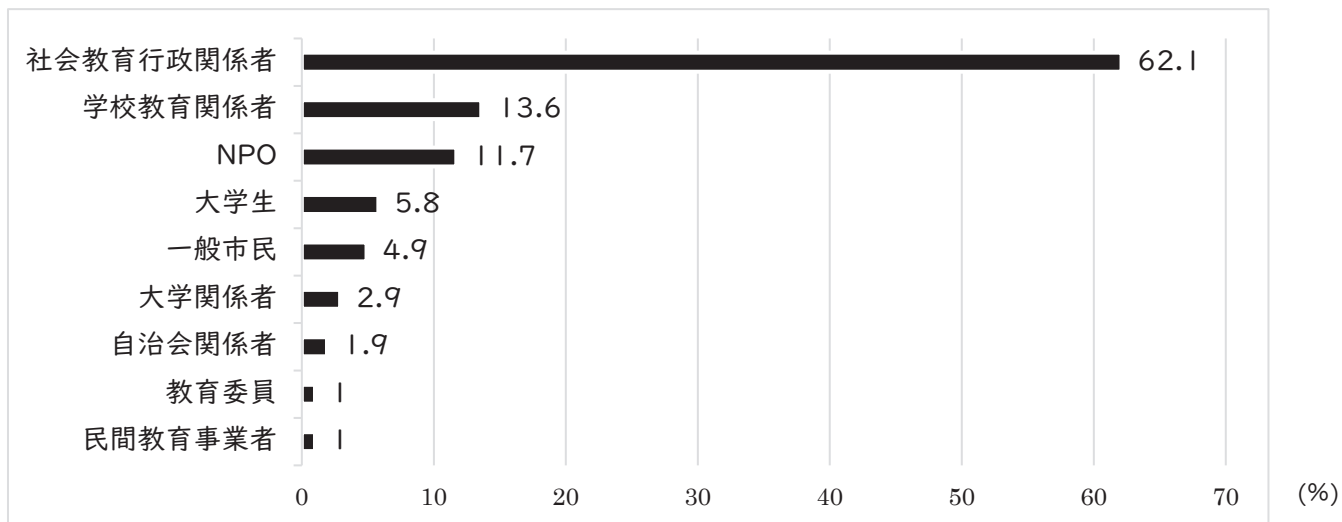
社会教育は、哲学を取り戻す作業にほかならないと思う

基調講演『社会教育とコミュニティデザイン』に感謝と連帯の思いを贈りたい

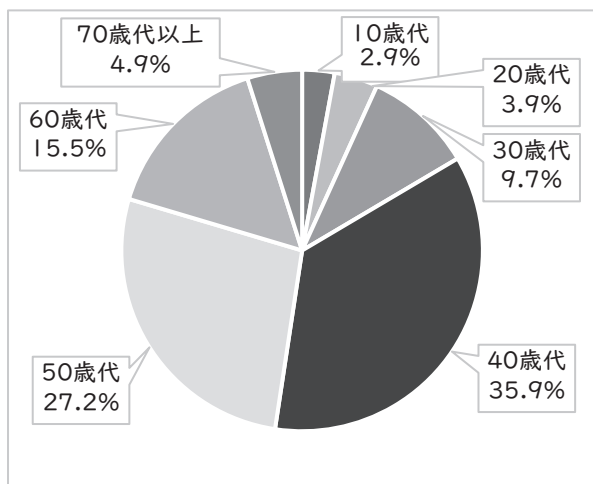


アンケート結果

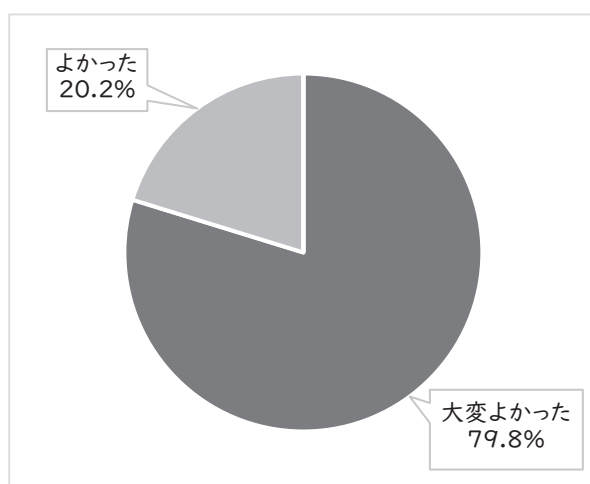
1 所属（複数回答）



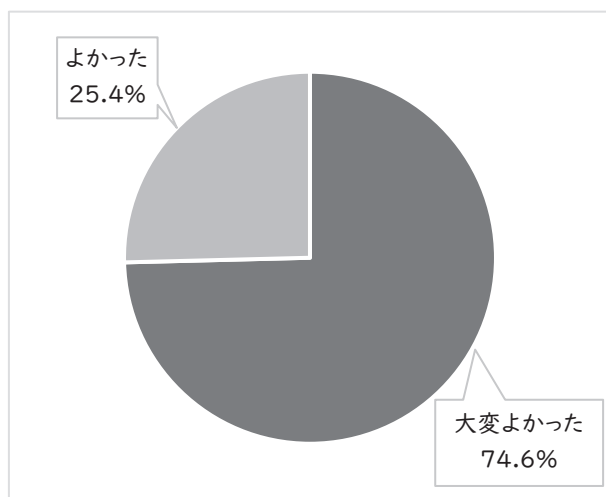
2 年代



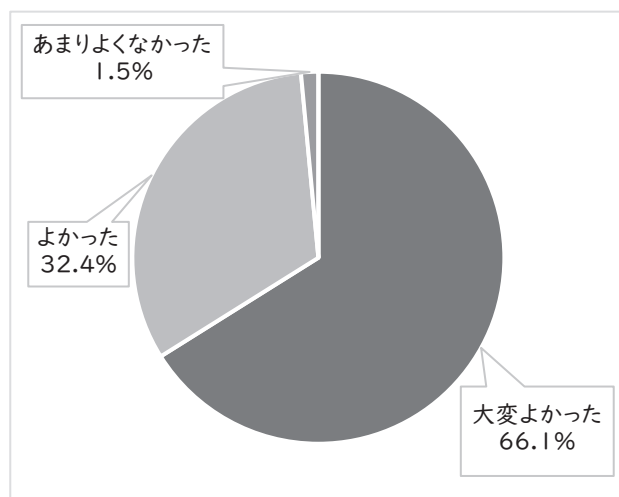
3 基調講演



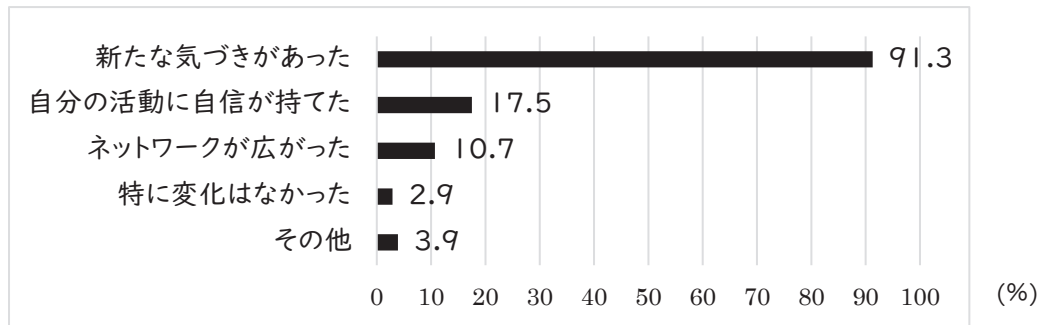
4 インタビューダイアログ



5 事例発表



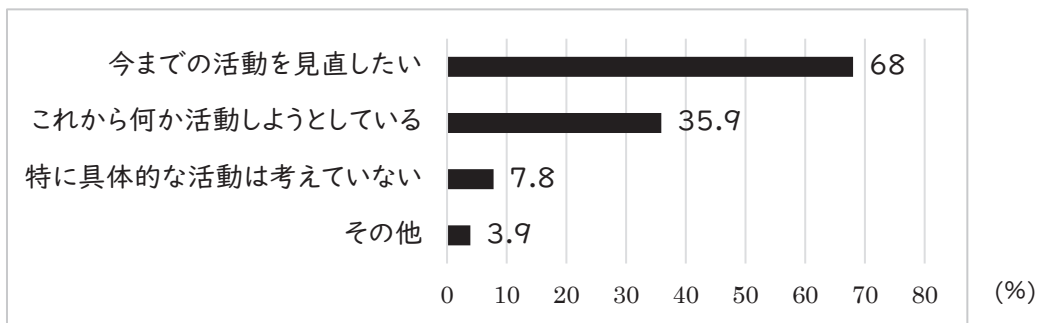
6 交流会をきっかけに、あなた自身にどんな変化がありましたか。(複数回答)



その他 (記述)

- ・行政が行う場合には、相手のメリットを明示することが必要であることが分かった。
- ・どのような言葉で伝えれば、第3者にとって分かりやすくなるのかが分かった。
- ・オンラインを活用したつながりの機会や運営の仕方についてアイデアが生まれた。
- ・人口減少が地域に与える影響の大きさを改めて感じた。 など

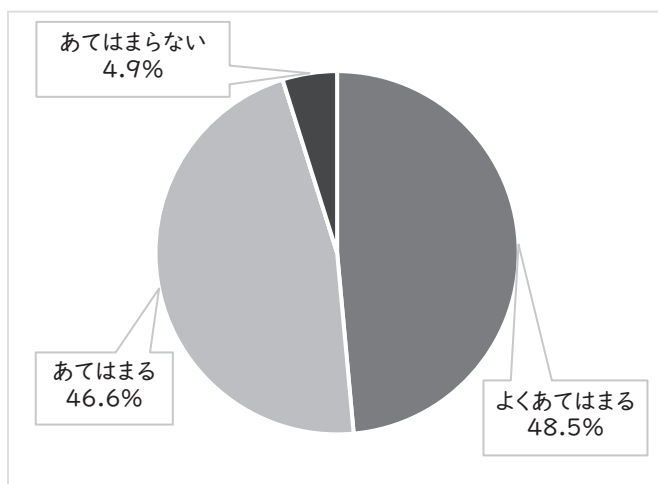
7 今後の具体的な活動について、どのようにお考えですか。(複数回答)



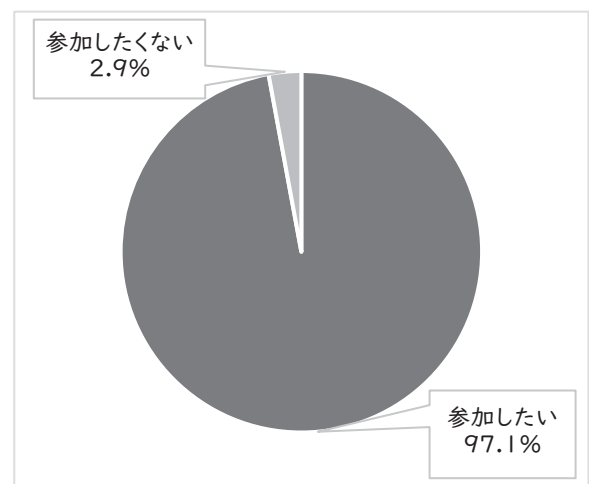
その他 (記述)

- ・消滅可能性都市であることを意識した活動を企画する。
- ・今回参加して学んだことを生かして、新しい企画を検討したい。
- ・新しい発見があったため、より良い社会教育を展開するにはどうすれば良いかを考えたい。 など

8 交流会を通して、コロナ後の社会教育の可能性を創造する意欲が高まりましたか。



9 次年度の交流会に参加したいと思いますか。



10 参加者の方からのご意見・ご感想

○第1部基調講演等について

- ・何事も目的をもって行うことが大切であると実感しました。
- ・様々な事例やアイスブレイクを紹介していただき、とても参考になりました。
- ・コミュニティ・スクールを推進する立場として、まちづくりを学校づくりに変えて視聴することで、今までの活動をより理解することができました。
- ・「〇〇のことに興味がある人が集まる」「興味があるネタを集める楽しさ」等、社会教育の本質に関わるお話でした。
- ・「子どもたちが学ぶことを嫌いにならないようにする」ことは重要なことであり、学校教育に携わる者として、ドキッとさせられる言葉でした。
- ・人と人とのつながりを楽しむこと、学ぶことでアイデアが生まれることなど、これまでの自分の取組とつながる点があり、自信になりました。

○第2部事例発表等について

- ・様々な取組の発表を見ることができたので良かったです。
- ・興味のある事例発表が同じ時間であったため参加できなかったことが残念です。
- ・新しい時代の学びを考えていくことが今後の社会教育、生涯学習の課題になっていくと思いますが、まさに事例発表でたくさんの学びを得ることができました。
- ・参加者同士の交流の時間は、15分だと短く感じました。自己紹介や感想、参考になった点などで話が終わってしまい、課題解決の方法まで話し合うことができませんでした。
- ・茨城県外の実践にも大きな関心を持つことができました。

○オンラインでの開催について

- ・オンラインであったため、現地に行かなくてよく参加しやすかった。
- ・オンデマンド配信のため、仕事の隙間に何回かに分けて視聴することができて良かったです。
- ・オンラインのため、全国各地の参加者と交流をすることができたのがよかった。
- ・ZOOMの操作について、より丁寧な案内をお願いします。県民の誰もがより参加しやすい環境を整えていただければ、ありがたいです。

○その他

- ・人と人のつながりが地域づくりを活性化させる基礎だと思った。
- ・教員は、「生涯教育、社会教育の中の学校教育」という意識がありません。どうしたら現場の教員が社会教育に目を向けられるか、社会教育の視点を日々の学校教育に取り入れることができるかを考えていきたいと思います。
- ・コロナ禍の中、開催をしてくださり、ありがとうございました。事務局、スタッフの皆様の工夫とご努力に感謝いたします。次年度も、ぜひ参加したいと思いますので、継続して開催できるようよろしくお願いいたします。

座談会 「関東近県生涯学習・社会教育実践研究交流会の これまでとこれから」

進行：茨城県教育庁総務企画部生涯学習課社会教育主事 國府田 大

参 加 者



【阿部 裕美 氏】

現 常陸太田市立西小沢小学校長
元 茨城県県北教育事務所主任社会教育主事



【成田 悦子 氏】

現 水戸市立大場小学校長
元 茨城県鹿行教育事務所主任社会教育主事



【菅谷 政之 氏】

国立教育政策研究所社会教育実践研究センター
専門調査員



【知久 鉄平 氏】

群馬県教育委員会事務局生涯学習課社会教育主事



【松橋 義樹 氏】

常磐大学人間科学部教育学科助教



【長谷川 幸介 氏】

茨城県生涯学習・社会教育研究会会長

【はじめに】



最初に関東近県生涯学習社会教育実践研究交流会（以下、
関東近県交流会）が始まった経緯をお話します。

平成 26 年に当時の国立教育政策研究所社会教育実践研究センター（以下、社研）のセンター長から九州・中国・四国地方では、生涯学習・社会教育関係の交流会を盛んに行っているのだが、同じようなことを北関東で行うことはできないかという話をいただきました。

当時の茨城県生涯学習・社会教育研究会の会長である菊池龍三郎先生がそのお話を快諾したことで、関東近県交流会が始まりました。始める上で考えたことは、これまで生涯学習・社会教育は、時代の変化に対応し、その一つ一つの生涯学習・社会教育に関する実践には、関わった担当者の思いや物語が隔されているということです。この物語を共有することが、生涯学習・社会教育の現在を知ることであり、次の時代を作っていく糧になるのではないかと考えました。だから、一人一人の生涯学習・社会教育に関わる実践の物語を共有し、共感し、参加者の今を語り合う。できれば飲みながら、みんなで交流を深めて、明日の英気を養う形の交流会にしたいと考えました。

【第1回大会から第7回大会まで】



國府田： それでは、第1回大会から順番に振り返ります。第1回大会は平成 27 年 11 月7日(土)、8日(日)の日程で、茨城大学を会場に、「県域を越えて「学びによる地域づくり」の輪を広げよう！」をテーマとし、開催されました。長谷川先生に振り返っていただきます。



第1回大会は、初めての大会でしたので、大変苦労しましたが、関東近県のご協力もあり、多くの実践報告が行われました。また、夜に行われた情報交換会は、大変盛り上がったのを覚えています。



國： 第2回大会は、平成 28 年 10 月 15 日(土)、16 日(日)の日程で、茨城大学を会場に、「今こそ社会教育の底力を！」をテーマとし、開催されました。阿部さんに振り返っていただきます。



強く印象に残っていることは、高校生の事例発表があったことです。茨城東高等学校の生徒会の皆さんが、エコ活動の取り組みについて発表してくださいました。高校生が発表する姿が、参加者全員に元気を与えてくれたと思います。

國： 第3回大会は、平成 29 年 10 月7日(土)、8日(日)の日程で、茨城大学を会場に、「社会教育の大きな波を起こそう！」をテ

一マとし、開催されました。成田さんに振り返っていただきます。



一つの事例発表が終わるごとに、次の事例発表を聞こうと、何百人という参加者が、茨城大学の教室脇の廊下を所狭しと移動する様子が圧巻でした。また、事例発表の後の参加者同士の協議が非常に熱を帯びていました。先ほど夜の飲み会の話が出ておりましたけれども、その熱気は、夜の情報交換会まで続いていました。

國： 第4回大会は平成 30 年9月 22 日(土)、23 日(日)の日程で、茨城大学を会場に「LINK to Action! ～自分らしい未来のための現場報告～」をテーマとし、開催されました。阿部さんと成田さん、お二人に振り返っていただきます。阿部さんからお願いいたします。



私は広報部でしたが、若い部員の力が、輝いていたように思います。先ほど大会テーマが紹介されましたが、第3回大会までの漢字が多く並んだ堅苦しいイメージを一掃して、さわやかで明るいイメージになりました。テーマに合ったチラシも作られ、これまで興味を持たなかった人たちが手に取り、参加してみたいと思うようなチラシになったと思います。報告書もリニューアルを図りました。事例発表のページは、活動の工夫や成果・課題、協議で参考になった点という枠組みにしました。大会前に枠組みを作ることで、話を聞く視点について共通認識をもつことができました。また、部会制になり、一人一人に役割があることで、実行委員の当事者意識が高まった大会であったと感じています。

國： 続いて、成田さん、お願いいたします。



運営部を担当しました。具体的には、オープニングやクロージング、夜の情報交流会の進行、そして基調講演の記録などを行いました。部会で、それぞれの役割を明確にすることで、その日だけお手伝いに行くというような受け身的な関わりではなくて、当事者意識が高まり、様々な工夫も見られるようになったと思います。また、みんなで作り上げることで一人一人が充実感を得られたと思います。

國： 第5回大会は令和元年 12 月7日(土)、8日(日)の日程で、茨城県三の丸庁舎及び茨城県立図書館を会場に、「Design to Next 支え合う心と熱い想いで明日を創る」、をテーマとし、開催されました。知久さんに振り返っていただきます。



第5回大会から、県外(福島県、群馬県、埼玉県、神奈川県)の実行委員が加わりました。実行委員として参加することによる成果が二つありました。

一つ目は、県外実行委員同士のつながりができたことです。私にとってはこの出会いが大変貴重な機会となりました。

二つ目は、生涯学習・社会教育の底力を実感することができたことです。人と人とのつながりが起こす化学反応が、人を感化させたり、奮い立たせたり、やる気にさせたりする力があるのだと感じました。

國： 第6回大会は令和2年 12 月 25 日(金)から令和3年3月 30 日(火)の期間で、「Design to Next II ～ウィズコロナ時代の生涯学習・社会教育のあり方～」をテーマとし、オンデマンド配信で開催されました。菅谷さんより振り返っていただけますでしょうか。



遠方だったり忙しかったりこれまででは参加できなかった方々も、今回はオンデマンドということで、参加できた大会であったと思います。パネルディスカッションのテーマが「新型コロナウイルス対応の実際」であり、報道関係者、医療看護関係者、社会福祉関係者、飲食業関係者と新型コロナウイルスに関係の深い分野の方たちが登壇したことで、実際の苦労などが共有できたと思います。その後のシンポジウムは、「ウィズコロナ時代の生涯学習・社会教育の課題と可能性」というテーマで、前橋市の公民館の館長、県立図書館の読み聞かせ講師、桜川市生涯学習課の社会教育主事のお話があり、ウィズコロナ時代に生涯学習・社会教育の分野で何を大切にしていくなが必要なのか、ということを共有できたのではないかと思います。

オンラインを活用した新しい方法での実施は、いかなる状況においても学びを止めないという点で、私も勉強させていただく機会になりました。



第6回大会は新型コロナウイルスの影響を受け、予定を何回も変えなければいけない状況でした。松橋先生も当事者の一人でしたが、何か一言ありませんか。



これまで同様にはいかない中で開催するために、基調講演はオンデマンドにするのはどうだろうかという提案をいたしました。その他にも様々な知恵を出し合い、大変でしたがやりがいのある大会でした。

國： 第7回大会は、令和3年 10 月1日(金)から 11 月 30 日(火)の期間で、「Design to Next III つながり、拓かれる生涯学習・社会教育」をテーマとし、第1部をオンデマンド配信、第2部を同時双方向通信で開催いたしました。松橋さんより振り返っていただけますか。



第1部インタビューダイアローグの聞き手をやらせていただきました。基調講演講師及びインタビューダイアローグの話し手である山崎さんには、非常に面白い話をしていただいたので、私は生涯学習・社会教育に関連させながら話を引き出すことを考えながらインタビューを行いました。

第2部は、Zoom を使って同時双方向通信で事例発表を行いました。12 の事例を四つの分科会に分け、それぞれの事例発表のあとに、参加者同士の交流の時間がとられました。新たなチャレンジでしたが、来年度以降につながる形を示すことができたと思っています。

國： 第6回大会では交流の機会をもてなかったのが、第7回大会ではオンラインであっても交流の機会をもつ、ということが大きなテーマだったと思います。実現する上で若い方たちが活躍されていたのも印象的でした。



第7回大会は24の都道府県から参加者がいたということにびっくりしました。もう関東近県ではなく、全国規模だと思います。社研からお話があつて始まったことですが、随分と大きくなったなあと感じました。

【関東近県交流会に関わって感じたこと、現在の業務で生かされていること】

國： ここからは、登壇者の方たちに同じ問いかけに対してそれぞれにお答えいただきたいと思います。まず、関東近県交流会に関わって感じたこと、また、現在の業務で生かされていることなどについて、菅谷さん、知久さん、成田さん、阿部さん、松橋さんの順番でお答えいただけますでしょうか。



私は昨年度、今年度と関わらせていただいています。コロナ禍において、中止となる研修会などが多く見受けられる中、学びを止めないという強い思いのもと、オンライン等の新しい手法を模索し導入しながら開催し続けている点で関東近県交流会は、素晴らしいと感じています。

特に今年度は分科会で参加者同士が交流する機会があつたのですが、やはり横のつながりといいますか、少人数で話をできる機会というのは非常に大切だと感じました。



まず感じたことはやはり、生涯学習・社会教育の底力ということです。これをぜひ多くの生涯学習・社会教育関係者の方々に、関東近県交流会に参加することで体感してほしいと思っています。そのために私は、群馬県内の生涯学習・社会教育関係者に一

人でも多く関東近県交流会に参加していただけるように、働きかけをしていきたいと考えています。参加してよかったなと私自身が思っておりますので、それをいかに本県の関係者に伝えていけるかというのが自分自身の使命であると考えております。



私は、関東近県交流会に関わることで、自分自身の感じ方や考え方に大きく影響を受けた、と思っています。それまでの私は、学校教育現場ばかりにいましたので、生涯学習・社会教育に関わる人の多様さや熱量に大変驚きました。そして、教育というと、学校教育の部分ばかりを考え、自分たちだけで何とかしなければならぬというふうに狭い見地で考えていたのですが、学校を支援しようとしてくださる方がこんなに周りにたくさんいるということに気付いて、自分の視野の狭さを痛感しました。長い人生の中で、学校に関わる時間は、一部分に過ぎないと思います。だから、就学前だとか、卒業後だとか、あるいは学校の周りとかに、生涯学習・社会教育があることで、それぞれの人生が、豊かになるというふうに考えるようになりました。

そのことが、現在の仕事にどのように生かされているかというと、子供や保護者を見るときに、これまでの自分であれば、四角四面にこうあるべきと接していたと思うのですが、少し寛容に構えて、そういうのもありだよなとか、こういうこともあるよと言葉かけすることができるようになったと感じています。例えば、不登校のお子さんやその保護者に対してだとか、LGBTの傾向があるお子さんやその保護者に対してだとかに接するときに感じています。

また、教員にできることは限りがあるので、地域や保護者に手伝ってもらってもいいのだなと思うようになりました。市の教育委員会だとか関係機関、専門家や詳しい人たちと連携したりして、みんなで子供たちの育ちを見守ることが大切であると考えようになりました。子供は学校だけで育てるのではなく、教員と保護者が連携して育てることが必要であると思います。そこに地域の教育力を取り込んでいくことでさらに充実するのではないかと思います。



生涯学習や社会教育に携わることで、地域には地域課題に目を向けて、自分たちの力で何とかしようと思っている人たちが、たくさんいるということを感じることができるようになったと思います。その経験は学校に戻った今も生かされていると感じています。

具体的な話として、今勤務している学校は、今年度末で閉校を迎えます。3年前に赴任したのですが、赴任した4月に、突然校長室にお父さん方が3名いらっしやいて、「おやじの会」をPTA組織の中に入れてほしいという相談をいただきました。西小沢小学校が閉校になっても、「西小沢おやじの会」を作ることによって「西小沢」の名前

を残し、地域のつながりを残したいということを強くおっしゃるのです。「おやじの会」の継続のために息切れしない活動の在り方などを一緒に考えていければと思っています。



関東近県交流会は、単に実践を知るというだけではなく、そこから何かいろんなアイディアを、生み出せるような場にならなくてはいいと思います。実践について交流すると「大変だけど頑張ろうね。」というところで終わってしまいがちですが、それではいけないと感じています。関東近県交流会をどう発展させるかということについて明確な答えを持っているわけではないのですが、発展できる可能性があるな、ということを経験を3年間、関わらせていただいている、というのが一つです。

もう一つは、私は常磐大学人間科学部教育学科にという教員養成がメインの学科に所属しています。学科に入ってくる学生のほとんどが、教員になることを目指しています。そういう中で私は教育社会学という科目を教えています。生涯学習や社会教育そのものについて講義する科目ではないのですが、生涯学習や社会教育をまったく知らない学生が、私の授業を聞いたり、話をしたりする中で、学校教育以外に目を向けなくてはいい、ということに気付いてくれています。これからもそういう学生を増やさなければいけないと思っています。また、教員を目指す学生には、教育という共通の土台の上にある、学校教育を含めた多様な教育の中で学校教育がどうあるべきなのかを考える必要があるということを感じてほしいと思っています。

そうしたときに、関東近県交流会は、学生が今まで知らなかった教育実践に触れる貴重な機会でありまして、学校での教育活動と何が違って、学校での教育活動どこに接点があって、ということを考えてもらえる場でもあると思っています。

【関東近県交流会の今後について】

國： 続いて、皆さんに関東近県交流会が今後どのような大会になると良いと思うかについてお聞きしたいと思います。先程と同じ順でお願いします。



第6回大会の報告書の中に『今大会は全国で逡巡し続けている仲間へのメッセージをつくる社会教育実践に他ならない。』と書いてあります。逡巡という言葉を知らなかったで、意味を調べると、しり込みすること、ためらうこと、という意味があるそうです。昨年度はコロナ禍で、各種事業の中止が相次ぐ中、関東近県交流会は開催しました。まさに全国の仲間たちに向けたメッセージになったと思っています。これからも全国の仲間に向けて、先進的な交流会の在り方であったり、関東近県のすぐれた事例の発信であったりとメッセージを送り続け

てほしいと思います。それを続けることで「関東近県交流会がそろそろ開催されるよね。」とか、「今年はどんなテーマの事例発表があるのかな。」とか、全国の生涯学習・社会教育に関わる方々から楽しみにされるようになって良いと思います。



今回、私は県外の実行委員の立場でお話をさせていただいております。関東近県というのが、どこまでの範囲を指すのかは、様々なとらえ方があると思いますが、今後はより多くの県外関係者が、実行委員として大会運営に関わり、関東近県の交流が深まってくことを期待しています。実行委員となると、仕事が増えるのではないかとマイナスのイメージもありますが、コロナ禍で生涯学習・社会教育活動が停滞しているときだからこそ、関東近県の交流を深めつつ、さらにはつながりを広げていながら、一緒に盛り上げていければと考えております。また、今回の座談会のように、新たなチャレンジが今後もできると思います。今後も関東近県交流会にはチャレンジする姿勢を持ち続けてほしいと思います。



関東近県交流会に参加して、基調講演を聞いたり、様々な事例発表に触れたりすることは、自分の視野や可能性が広がる素晴らしい機会だと思います。第6回大会からは、感染症対策を講じながら、オンラインなどを活用して、様々な工夫を凝らした上で開催をしてられました。コロナ禍にあっても学びを止めない、という姿勢で取り組んでいただいていることに敬意と感謝を表します。社会は、ますます多様性を理解し、受け入れることが重要になってきています。年齢・性別・人種・国籍・信条・働き方・学び方・ライフスタイルなど今後、生涯学習・社会教育に求められる分野領域は多岐にわたると思います。多様な方々が、それぞれの当事者を支える人材の育成だったり、当事者自身が輝ける場所を創出したり、そういったことを模索していけたら、と思っています。今後も状況に応じて、可能な方法で開催を継続していただけたら、と思います。



今後、関東近県交流会は、地域で活躍している人たちをつなぐ役目を果たすことが重要であると思います。第6・7回大会は、コロナ禍の影響でオンラインになりましたが、この経験を生かして、一堂に会する以外の方法も考えていく必要があると思います。例えば、事例発表者の活動をデータベース化して、課題と思っているキーワードを検索すると発表事例につながっていけるような仕組みができるとよいと思います。また、オンラインを活用することで、関東近県だけではなく、全国や海外で活躍している人たちとつながることもできると思います。さらに、集合開催の時は、生涯学習・社会教育に関するメッセージボードが設置されますが、オンライン上でもメッセージボードを作ることで、誰かが疑問に思ったことに答えを返してく

れたりとか、一緒に悩んでいますというような交流ができたりすると、よいと思います。



関東近県交流会は、大がかりなイベント的なものを目指すのではなく、地に足をつけてかつ小回りの利くものを目指すのがよいと思います。いい意味で派手さがなく、壁がない、参加者の実践の現在の到達点を確認するとともに、次の実践に向けての方向性を見出せる場になることを目指すよいと思います。

もう一つは、生涯学習を社会教育の枠だけに留めるのではなく、学校教育や教育以外の分野を巻き込んだ交流会にしていこうと思います。

【報告書をご覧になっている方たちへのメッセージ】

國：最後に報告書をご覧になっている方達に向けてメッセージをお願いします。



皆様と同じ思いで活動されている方々がたくさんいるということが、報告書を見ていただけるとわかると思います。現在すでに活動されている方や、今から行動に移していきたいと考えている方、いろいろな立場の方々が、生涯学習・社会教育に関わっていく上で何かの気づきであったり、新たな一歩を踏み出すきっかけとなったりするとよいと思います。



これまで3回の実行委員としての関わりを振り返ると、同じ「Design to Next」というテーマを継承しつつ、コロナ禍の中で新しい手法とか考え方を模索しながら、着実に進化を遂げてきているというのを体感させていただきました。今回の事例発表は、どの実践も学びを通じた人づくりや地域づくり、つながりづくりに向けた素晴らしい実践であり、積み重ねがあることに非常に感銘を受けました。基調講演では、改めて学びのプロセスが大切だということ、学びの中で喜びを連鎖させることが生涯学習・社会教育の重要な役割であることを学びました。同じ課題、テーマに対して興味がある人が自然と集まり、一緒に学び合うという一連のプロセスをいかにしかけていかは、我々社会教育の立場の役割であり、醍醐味であるということを確認いたしました。

是非また、皆さん一人一人の思いを結集して、関東近県の交流の風を、一緒に起こしていけるといいな、と思っております。



現在の居場所は、それぞれ社会教育現場であったり、学校現場であったり、地域であったり、それぞれだと思いますが、大きく見ている方向、目指している方向は、似ていたり一緒であったりす

ると思います。ともに歩む仲間がいるということに力にして、みんなで手を取り合う気持ちで先に進んでいけたらと思います。ともに頑張りましょう。



この報告書を読もうと思ってくださる方がいるということが、すごいことだし嬉しいことだなと思います。第4回大会テーマの副題に『自分らしい未来のための現場報告』という言葉があるのですが、皆さんが元気に仲間とつながり、お互いに求めすぎず、休みながら、学びも大切ですが楽しみながら、自分らしい未来につながっていくことを大切にして、活動を継続していただけたらと思います。



第5回大会の実行委員会のときに、長谷川先生が「Design to Next」というワードに込めた思いを語られた時、うなずける部分もありつつ、フワッとしている部分もあるワードだなと正直思いました。しかし、コロナ禍になり、今までとは違う生涯学習・社会教育の形も考えていかなければいけないとなった時に「Design to Next」という言葉が、すごく好きになりました。

「Design」には、「計画」という意味もありますが、大会のテーマとしてこのワードには、「意思を持って新しい形を作っていく」という意味が込められている気がします。ですから来年度以降のテーマがどうなるかわからないですけど、この「Design to Next」というワードを大事にしながら、報告書を読まれる皆さんや全国の生涯学習・社会教育関係者の皆さんと、新しい実践の形を作っていければ、というふうに思っています。

【おわりに】

國：長谷川先生、最後に一言いただいてもよろしいでしょうか。



皆さんには、生涯学習・社会教育に関係する人たちの「熱量」や「底力」、「学びをやめない」という思いのところを語っていただきました。これは重要なことだと思います。

また、私たちは地に足を着けた生涯学習・社会教育の実践をベースにしてやっていこうという思いが強いので、フェイスブックの「いいね！」に表現されるような共感ではなくて、もっと深いレベルであり、ライブ感がある、生涯学習・社会教育の実践を進めていきたいと思いました。

國：皆様、本日はご多用の中ご参加いただきましてありがとうございました。以上で座談会を閉じます。

事業の実施体制

【主 管】

関東近県生涯学習・社会教育
実践研究交流会実行委員会

【共 催】

- 茨城県教育委員会
- 茨城大学
- 茨城県生涯学習・社会
教育研究会

【後 援】

- ・福島県教育委員会
- ・群馬県教育委員会
- ・栃木県教育委員会
- ・埼玉県教育委員会
- ・千葉県教育委員会
- ・神奈川県教育委員会
- ・国立青少年教育振興機構
- ・茨城県社会教育委員連絡協議会
- ・茨城県公民館連絡協議会

【協 賛】

- ・NPO 法人ひと・まちなっとわーく
- ・NPO 法人インパクト
- ・NPO 法人日本スポーツ振興協会
- ・（公財）茨城県教育財団
- ・（公財）日本教育公務員弘済会茨城支部

【協 力】

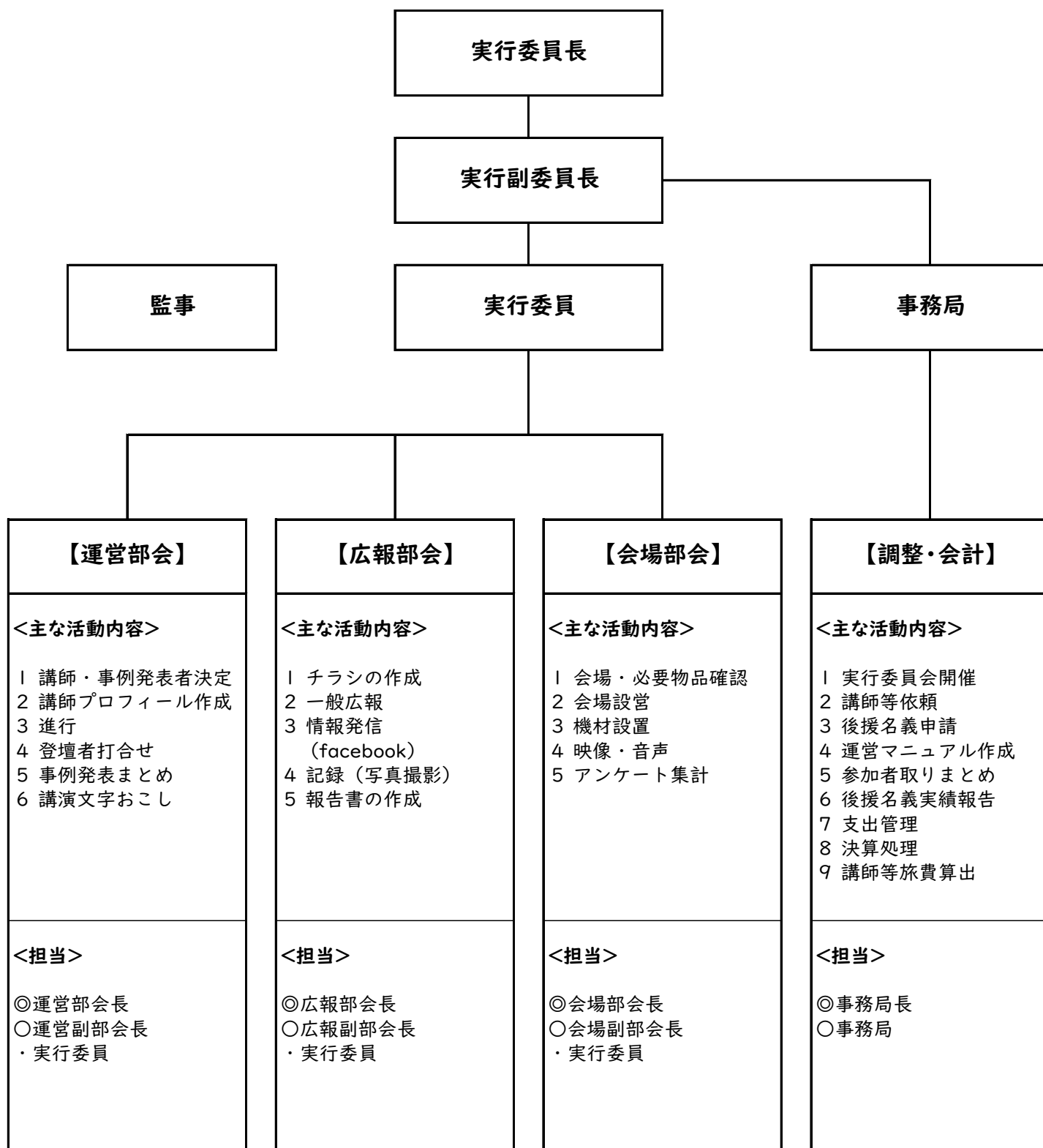
- ・国立教育政策研究所
- ・茨城県教育庁社会教育主事会

関東近県生涯学習・社会教育実践研究交流会

【参加者】

都道府県、市区町村教委の社会教育行政関係者、首長部局の関係職員、NPO、企業、関係団体・機関、大学、学校関係者、自治会、その他学びを通じた地域の課題解決に関心がある者であれば誰でも参加可能

運営組織・活動内容



参加：無料

社会教育等関係者の研修にも
オススメ!

Design to Next Ⅲ

つながり、拓かれる生涯学習・社会教育

対象

学びを通じた
地域の課題解決に関心がある方
(誰でも参加できます!)

第1部 基調講演等

開催方法	オンライン(オンデマンド配信)
配信期間	令和3年10月1日(金)~11月30日(火)
演題	「社会教育とコミュニティデザイン ~これからの時代の人のつながりとは~」
講師	studio-L代表 山崎 亮氏

第2部 事例発表等

開催方法	オンライン(同時双方向通信)
開催日程	令和3年10月16日(土)
日	12:30~オープニング
日	13:00~事例発表 17:00~クロージング
日	17:15 終了

第7回

関東近県 生涯学習・社会教育 実践研究交流会

共催	茨城県教育委員会、茨城大学、茨城県生涯学習・社会教育研究会
主管	関東近県生涯学習・社会教育実践研究交流会実行委員会
協賛	NPO法人ひと・まちなっとわーく、NPO法人インパクト
	NPO法人日本スポーツ振興協会
	(公財)茨城県教育財団、(公財)日本教育公務員弘済会茨城支部
後援	福島県教育委員会、栃木県教育委員会、群馬県教育委員会、埼玉県教育委員会
	千葉県教育委員会、神奈川県教育委員会、国立青少年教育振興機構
	茨城県社会教育委員連絡協議会、茨城県公民館連絡協議会
協力	国立教育政策研究所、茨城県教育庁社会教育主事会



同時代を生きる

私たちは第6回交流会を新型コロナウイルスパンデミックの中で開催しました。休会という選択もある中、「このような時期だからこそ社会教育の価値が問われるのではないか」との思いから、開催することにしたわけです。オンデマンド配信等の新しい方式を採用し、幾度もの変更を重ねながら実施しました。しかし、世界中に広がる新型コロナウイルス感染症はまだまだ収束の兆しさえ見せません。再び、本交流会の役割を見定めながらの出発になりました。

世界中の人間が「国境を越えた共通課題」に直面し始めていると感じます。この時代に、地球という環境の中で生きている「同時代性」を実感し始めているのかもしれませんが。東京オリンピックもまた「同時代性」を表現していたように思えます。「今、ここに、こうしてあることを共感する」契機であり、それが、これからの社会の基底になると考えました。

そこで、第7回交流会は次代を創り続ける「学びの活動」の方向性を探るべく、「つながり、拓かれる生涯学習・社会教育」というテーマを設定することにいたしました。基調講演は「社会教育とコミュニティデザイン～これからの時代の人のつながりとは～」と題し、山崎 亮氏（studio-L代表）にお願いできました（オンデマンド配信）。また、10月16日の「第2部事例発表」は関東近県の12の実践が報告されます。

AI社会の到来は、急速に私たちの暮らし方を変えつつあります。新型コロナパンデミックは私たちが営んできた「人のつながり」を変えつつあります。この事実にどう対応し、どのような近未来を創造し続けているのか、「社会的学びとつながり」の現在を語り合いたいと思います。

関東近県生涯学習・社会教育実践研究交流会
実行委員長／茨城大学 名誉教授

菊池 龍三郎

社会教育実践には、 その一つひとつに物語があります。

- あなたも、その物語に入り込んでみませんか
- あなたも、あなたの物語を考えてみませんか
- あなたとみんなの「幸せ物語」を創ってみませんか

第1部 基調講演等

オンデマンド配信



テーマ

令和3年 10月1日金～11月30日火

「社会教育とコミュニティデザイン
～これからの時代の人のつながりとは～」

講師

studio-L代表 山崎 亮氏

プロフィール

studio-L代表。関西学院大学建築学部教授。コミュニティデザイナー。社会福祉士。1973年愛知県生まれ。大阪府立大学大学院および東京大学大学院修了。博士（工学）。建築・ランドスケープ設計事務所を経て、2005年にstudio-Lを設立。地域の課題を地域に住む人達が解決するためのコミュニティデザインに携わる。まちづくりのワークショップ、住民参加型の総合計画づくり、市民参加型のパークマネジメントなどに関するプロジェクトが多い。

著者に『コミュニティデザインの源流』（太田出版）／『縮充する日本』（PHP新書）／

『地域ごはん日記』（パイインターナショナル）／『ケアするまちのデザイン』（医学書院）

●インタビューダイアログ 話し手：studio-L代表 山崎 亮氏
聞き手：常磐大学人間科学部教育学科 助教 松橋 義樹氏

第2部 事例発表等

同時双方向通信 令和3年10月16日(土)
オープニング 12:30~12:50

第①分科会 13:00~13:50

A 【群馬県】 障がい者「おうら青年学級」の生涯学習支援活動の取組 ～自立した生活と余暇活動の充実を目指して～

邑楽町教育委員会生涯学習課中央公民館 館長・社会教育主事 藤田 和良 氏

B 【茨城県】 「ちくせい若者まちづくり会議」の取組

筑西市人口対策部人口対策課 主任 水越 宣貴 氏
主事 倉持 朋奈 氏

C 【茨城県】 つながるひろがるNAMEGATAの未来 ～「どれみ」から始まった子育てサークルのあゆみ～

ママスマイル行方 代表 羽鳥 悦子 氏 他

第②分科会 14:00~14:50

D 【栃木県】 働き盛り世代を対象とした早朝教養講座 「宮の朝活」の取組

宇都宮市教育委員会事務局生涯学習課 係長 藤田 直樹 氏

E 【千葉県】 「シビックテック団体との協業事例からみる地域活性化の可能性」

Civic Tech Zen Chiba/Code for NAGAREYAMA 代表 白澤 美幸 氏

※シビックテックとは、シビック（市民）とテック（テクノロジー）をかけあわせた造語であり、市民自身がテクノロジーを活用して、地域課題等を解決する取組のこと

F 【茨城県】 映像作品を公開講座として提供する 「多文化理解パートナー育成講座～茨城の多文化共生を考える～」の実践から

茨城大学全学教育機構国際教育部門 准教授 瀬尾 匡輝 氏

第③分科会 15:00~15:50

G 【国立施設】 コロナ禍における青少年教育研究センターの取り組み

国立青少年教育振興機構青少年教育研究センター 企画室総務係員 大西 広海 氏

H 【福島県】 「はなわ探検隊！特産のダリアでふくしまの元気をPR！」 ～チャレンジ！子どもがふみだす体験活動応援事業の活用～

塙町教育委員会生涯学習課 主任主事 松本 静香 氏
// 学校教育課 主査 中畑 哲 氏

I 【茨城県】 「地域を補う」 ～折橋地域活性化P.Tの活動紹介と問題点～

折橋地域活性化プロジェクトチーム(P.T) 代 表 助川 仁一 氏
副代表 菊池 竹一 氏

第④分科会 16:00~16:50

J 【神奈川県】 地域のたからである子どもたちへの学習支援を通してみんなの居場所をつくる NPO法人こども応援丸 理事長 津田 眞利 氏

K 【埼玉県】 地域と連携・協働した教育の推進「おがわ学の実践・構築」 学校と地域の未来を創ろう！プロジェクトの取組

埼玉県教育局市町村支援部生涯学習推進課 指導主事 岡本 敏明 氏

L 【茨城県】 かすみがうら市リーダーズ高校生会の取組

かすみがうら市教育委員会生涯学習課 主任主査兼社会教育主事 齋藤 英明 氏

クロージング 17:00~17:15

第7回大会 関東近県生涯学習・社会教育実践研究交流会【参加申込書】

FAX 029-301-5339

E-mail shogaku1@pref.ibaraki.lg.jp

関東近県生涯学習・社会教育実践研究交流会実行委員会事務局（茨城県教育庁総務企画部生涯学習課内）宛

FAXもしくは、E-mailにて
左記申込先へお申込みください。

※原則、お一人ずつ申し込みが必要ですが、団体での申し込みを希望される際は、ご相談ください。

ふりがな			
氏 名			
所 属		役 職	
連絡先	TEL		
	E-mail	※オンライン参加を希望する方は必須	

大会の出欠等 ※以下太枠で囲まれた箇所の希望する項目の英数字に○を付けてください。

No.	内 容	期 日	参加方法等	申込締切																				
1	第1部 基調講演等	令和3年 10月1日(金)～ 11月30日(火)	1. オンライン参加（定員なし） ※YouTubeによるオンデマンド配信 2. 不参加	令和3年 11月1日(月)																				
2	第2部 事例発表等	令和3年 10月16日(土)	1. オンライン参加(定員300名) ※Zoomによる同時双方向通信 2. 不参加 1を選択した方は、 参加希望事例 発表を1つずつ 選択 参加希望事例発表 <table> <tr> <td>第1分科会</td><td>13:00～13:50</td><td>A</td><td>B</td><td>C</td></tr> <tr> <td>第2分科会</td><td>14:00～14:50</td><td>D</td><td>E</td><td>F</td></tr> <tr> <td>第3分科会</td><td>15:00～15:50</td><td>G</td><td>H</td><td>I</td></tr> <tr> <td>第4分科会</td><td>16:00～16:50</td><td>J</td><td>K</td><td>L</td></tr> </table>	第1分科会	13:00～13:50	A	B	C	第2分科会	14:00～14:50	D	E	F	第3分科会	15:00～15:50	G	H	I	第4分科会	16:00～16:50	J	K	L	令和3年 10月1日(金)
第1分科会	13:00～13:50	A	B	C																				
第2分科会	14:00～14:50	D	E	F																				
第3分科会	15:00～15:50	G	H	I																				
第4分科会	16:00～16:50	J	K	L																				

※第2部の申込者が定員を超えた際は、抽選となります。抽選の結果は、10月12日(火)迄にE-mailもしくはTELにてご連絡いたします。
※オンライン参加を希望された方に必要な情報は、準備が整いましたら、E-mailにてご連絡いたします。

【参加者の皆様へ】

- ・個人情報、本交流会に関すること以外の目的では使用いたしません。
- ・交流会の様子（写真、動画、アンケート内容等）をウェブサイト、オンライン配信、SNSや報告書等で使用することをご了承ください。
- ・第2部事例発表等では、Zoomを用いて、参加者同士の交流の時間をとる予定です。
- ・今後、新型コロナウイルス感染症の影響により、大会内容等を変更する可能性があります。（変更した際には、右記ウェブサイト等でお知らせいたします。）

最新情報は、以下QRコードより
ご覧ください。



ウェブサイト



フェイスブック

【問合せ先】 関東近県生涯学習・社会教育実践研究交流会実行委員会事務局

（茨城県教育庁総務企画部生涯学習課内） 担当：國府田

TEL:029-301-5318 FAX:029-301-5339 E-mail:shogaku1@pref.ibaraki.lg.jp

第7回大会参加者

■第7回大会参加者数一覧〔都道府県別（延べ人数）〕

都道府県	第1部	第2部	合計（人）
北海道	4	2	6
宮城県	1	1	2
福島県	5	3	8
茨城県	322	151	473
栃木県	10	7	17
群馬県	15	12	27
埼玉県	19	9	28
千葉県	9	6	15
東京都	12	7	19
神奈川県	12	7	19
新潟県	7	1	8
山梨県	1	1	2
長野県	1	1	2
岐阜県	1	0	1
静岡県	2	1	3
三重県	5	3	8
滋賀県	4	2	6
鳥取県	1	0	1
島根県	1	0	1
岡山県	3	2	5
広島県	1	0	1
佐賀県	4	0	4
熊本県	2	2	4
宮崎県	1	1	2
合計（24 都道府県）	443	219	662

【参考】

	1 日目	2 日目	合計（人）
第1回大会	314	168	482
第2回大会	331	184	515
第3回大会	334	203	537
第4回大会	450	186	636
第5回大会	301	156	457
第6回大会	230	227	457

※第6回大会は第1部、第2部

実行委員会名簿

No	役 職	氏 名	組 織 ・ 職 名	担当部会	備考
1	委員長	菊池 龍三郎	茨城県生涯学習・社会教育研究会 顧問(茨城大学名誉教授)	-	
2	副委員長	長谷川 幸介	茨城県生涯学習・社会教育研究会 会長	広報部会長	共催関係
3		池田 馨	茨城県生涯学習・社会教育研究会 副会長(NPO法人ひと・まちなっとわーく理事長)	運営部会長	
4		中村 麻子	茨城大学社会連携センター センター長	会場部会長	
5		市村 志保	茨城県教育庁総務企画部生涯学習課 課長	会場部会長補佐兼総務担当	
6	委員	松橋 義樹	常磐大学人間科学部教育学科 助教	広報部会	学歴者
7		儘田 茂樹	茨城県社会教育委員連絡協議会 会長	運営部会	社会教育関係
8		佐藤 孝弘	茨城県生涯学習・社会教育研究会 事務局次長	運営部会	
9		栗田 将夫	NPO法人ひと・まちなっとわーく 次長	会場部会	
10		鈴木 尚	NPO法人インパクト 代表	運営部会	
11		法堂 泰明	NPO法人日本スポーツ振興協会 県西生涯学習センター 副所長	広報部会	国・関係東近県
12		熊谷 智仁	(公財)茨城県教育財団 茨城県水戸生涯学習センター 次長兼企画振興課長	会場部会	
13		菅谷 政之	国立教育政策研究所社会教育実践研究センター 専門調査員	広報部会	
14		石井 智明	福島県教育庁社会教育課 主任社会教育主事	広報部会	
15		知久 鉄平	群馬県教育委員会事務局生涯学習課 社会教育主事	広報部会	県関係
16		阿左見 直昭	埼玉県教育局市町村支援部生涯学習推進課 社会教育主事兼指導主事	広報部会	
17		永野 文	神奈川県教育委員会教育局生涯学習部生涯学習課 副主任兼社会教育主事	広報部会	
18		仲田 郁夫	茨城県水戸教育事務所 主任社会教育主事	運営副部会長	
19		萩谷 佳之	茨城県県北教育事務所 主任社会教育主事	広報副部会長	
20		野口 孝幸	茨城県鹿行教育事務所 主任社会教育主事	会場副部会長	
21		荒井 克彦	茨城県県南教育事務所 主任社会教育主事	運営副部会長	
22		野村 隆	茨城県県西教育事務所 主任社会教育主事	広報副部会長	
23		白井 秀樹	茨城県水戸生涯学習センター 社会教育主事	会場部会	
24		小野瀬 静香	茨城県県北生涯学習センター 事業グループリーダー	広報部会	
25		内野 武	茨城県鹿行生涯学習センター 次長兼企画振興課長	運営部会	
26		勝田 篤	茨城県県南生涯学習センター 事業課長	会場部会	
27		石上 未来	茨城県県西生涯学習センター 企画グループ	広報部会	
28		平山 善規	茨城県立中央青年の家 副所長	運営部会	
29		小沼 希	茨城県立白浜少年自然の家 研修企画推進員	会場部会	
30		杉本 牧人	茨城県立さしま少年自然の家 社会教育主事	広報部会	
31		根本 拓	茨城県立図書館 社会教育主事	会場部会	市町村関係
32		飯田 真弓	水戸市教育委員会生涯学習課 社会教育主事	会場部会	
33		三澤 秀生	笠間市教育委員会生涯学習課 社会教育主事	運営部会	
34		深津 一郎	北茨城市教育委員会生涯学習課 課長補佐(社会教育主事)	広報部会	
35		石神 知子	鉾田市教育委員会生涯学習課 主査(社会教育主事)	会場部会	
36		飯田 英路	土浦市教育委員会生涯学習課 主査(社会教育主事)	運営部会	
37		高橋 直之	五霞町教育委員会生涯学習グループ 主幹(社会教育主事)	広報部会	
38	監事	澤畑 和宏	株式会社茨城新聞社地域連携室 部長(NIE事務局長)	-	
39		中島 弘江	茨城県教育庁総務企画部生涯学習課 課長補佐(総括)	-	
40	事務局長	大森 聡	茨城県教育庁総務企画部生涯学習課 課長補佐(振興)	-	
41	事務局	大月 光司	茨城県生涯学習・社会教育研究会 事務局長	-	
42		國府田 大	茨城県教育庁総務企画部生涯学習課 社会教育主事	-	
43		川上 和正	茨城県教育庁総務企画部生涯学習課 主査	-	
44		石井 愛里	茨城県教育庁総務企画部生涯学習課 会計年度任用職員	-	

歴代大会テーマ等

会場：茨城大学	【第1回大会】 平成27年11月7日（土）、8日（日）
大会テーマ	県域を越えて「学びによる地域づくり」の輪を広げよう！
特別講演	講 師：三浦 清一郎 氏（月刊生涯学習通信「風の便り」発行人、編集長） テーマ：社会教育不要論への挑戦 ～学習から教育への再修正こそ立国の条件～
事例発表 カテゴリー	○ 学校・家庭・地域の連携 ○ 指導者養成・研修 ○ 地域課題の解決に向けた取組 ○ ボランティア関係 ○ 青少年教育

会場：茨城大学	【第2回大会】 平成28年10月15日（土）、16日（日）
大会テーマ	今こそ社会教育の底力を！
特別講演	講 師：明石 要一 氏（千葉敬愛短期大学 学長） テーマ：社会教育に問う！今、社会教育にできることとは
事例発表 カテゴリー	○ 学校・家庭・地域の連携 ○ 家庭教育支援 ○ 地域課題の解決に向けた取組 ○ 青少年教育

会場：茨城大学	【第3回大会】 平成29年10月7日（土）、8日（日）
大会テーマ	社会教育の大きな波を起こそう！
特別講演	講 師：三村 信男 氏（茨城大学 学長） テーマ：国連持続可能な開発目標（SDGs）がめざすもの ～世界と地球はどうつながっているのか～
事例発表 カテゴリー	○ 学校・家庭・地域の連携 ○ 地域課題の解決に向けた取組 ○ 青少年教育

会場：茨城大学	【第4回大会】 平成30年9月22日（土）、23日（日）
大会テーマ	LINK to Action！～自分らしい未来のための現場報告～
トークセッション	登壇者：馬場 祐次郎 氏（全国社会教育委員連合副会長・常務理事）他 テーマ：①社会教育・生涯学習分野の激動期に、社会教育の到達点と意義を確かめる ②関東から情報発信をするために、関東近県生涯学習・社会教育実践研究 交流会が進むべき方向性
事例発表 カテゴリー	○ 公民館・施設と地域づくり ○ 市民の手による活動 ○ 地域活動と学校 ○ 環境・国際に関する活動 ○ 大学・図書館・企業との連携

会場：三の丸庁舎	【第5回大会】 令和元年12月7日（土）、8日（日）
大会テーマ	Design to Next 支え合う心と熱い想いで明日を創る
基調講演	講 師：合田 隆史 氏（尚絅学院大学 学長、日本生涯学教育学会 会長） テーマ：学びの輪を育て、地域の明日をひらく ～社会教育の底力～
事例発表 カテゴリー	○ 学校と地域の未来をデザインする ○ 学びの施設の活動をデザインする ○ 持続可能な地域をデザインする ○ 寄り添う心をデザインする

オンデマンド配信	【第6回大会】 令和2年12月25日（金）～令和3年3月30日（火）
大会テーマ	Design to Next II ～ウィズコロナ時代の生涯学習・社会教育のあり方～
基調講演	講 師：山極 壽一 氏（京都大学 前学長） テーマ：人類の進化に合った教育とは何か
その他	○ パネルディスカッション 「新型コロナウイルス対応の実際」 ○ シンポジウム 「ウィズコロナ時代の生涯学習・社会教育の課題と可能性」

オンライン	【第7回大会】 令和3年10月1日（金）～令和3年11月30日（火）
大会テーマ	Design to Next III つながり、拓かれる生涯学習・社会教育
基調講演	講 師：山崎 亮 氏（studio-L 代表） テーマ：社会教育とコミュニティデザイン ～これからの時代の人のつながりとは～
その他	○ 事例発表 ○ インタビューダイアログ

～編集後記～

新型コロナウイルス感染症拡大の状況を鑑みて、オンラインでの実施となった本大会。

画面越しでも発表者の熱い想い、エネルギーが伝わり、想い描く「希望」や「ビジョン」を共有することができた、有意義な大会となりました。

大会テーマの「つながり、拓かれる」というキーワードの通り、発表者の実践活動によってつながり、拓かれた世界が、本大会を通じて、私たちと出会い、新たなつながりが生まれました。

このつながりを絶やさず、そして私たちが迎える新たな世界への「希望を切り拓く力」として、出会った皆さんと共にまた一歩、踏み出したいと思います。

茨城県県西生涯学習センター企画グループ

石上 未来

昨年度に引き続き、コロナ禍のもと開催されました。

しかし、昨年とは違いオンライン（同時双方向通信）を活用しながら参加者の方々をつながることができたと感じました。

画面越しではありますが、久しぶりに人と人がつながり「よかった」「楽しかった」などの声をいただけて、あらためて『つながる』ことの大切さを学ばせていただきました。

関係者の皆様に支えて頂きながら、広報部として協力させていただけたこと感謝いたします。

茨城県県北生涯学習センター

事業グループリーダー 社会教育士

小野瀬 静香

おわりに

関東近県生涯学習・社会教育実践研究交流会実行委員会

第7回大会関東近県生涯学習・社会教育実践研究交流会は、多くの方に支えられ無事開催することができた。ここで、本大会について振り返ってみたい。

1. 第6回大会の反省

第6回大会は、新型コロナウイルス感染症により、第5回大会までのように、対面での実施は困難であったため、オンデマンド配信（基調講演、パネルディスカッション等）で実施した。コロナ禍でも学びを止めず実施できたこと、参加する都道府県が広がったこと（15都道府県）などの成果があったが、交流の機会を作れなかったことが大きな課題となった。

2. 第7回大会に向けて

第7回大会は、①コロナ禍でも開催すること、②交流の機会をつくることを念頭に入れながら準備を進めた。

第1回実行委員会（5月開催）では、2部制にし、第1部（基調講演、インタビューダイアログ等）をオンデマンド配信、第2部（事例発表等）を会場参加で実施することを決定した。

第2回実行委員会（9月開催）が行われた時期は、新型コロナウイルス感染症のピークであり、茨城県内の学校等も休校の状況であった。このような状況では、第2部を会場参加で実施することは難しいと判断し、同時双方向通信（Zoom）での実施に切り替えた。オンデマンドにしなかったのは、交流の機会を作るためである。

3. 同時双方向通信での実施について

同時双方向通信を実施する上で、④担当職員のスキル、⑤パソコンやマイクなどの機材、⑥インターネットの通信環境が重要であると感じた。特に④が今大会を成功させるための肝であったと思う。同時に3会場事例発表を展開していくため、担当者のスキルアップが必要であった。担当者は、短い時間の中、試行錯誤しながら、学び、チャレンジしスキルを身に付けていった。その過程は、課題解決学習そのものであった。

4. 第7回大会を終えて

第7回大会は、①コロナ禍でも開催することに関して、達成することができた。また、オンラインを活用することにより、これまでで最多の24都道府県より参加があったことは、大きな成果であった。②交流の機会をつくることに関して、Zoomを使うことにより、一定の成果を得たものの、やはり対面ならではの深まりや継続したつながりという点では、弱いと感じた。交流の持ち方については、今後改善していく必要があると考える。

本大会が、参加者及び関係者にとっての学びとなり、今後の活動へのきっかけとなったのであれば幸いである。

令和4年2月発行

〈編集・発行〉 第7回大会関東近県生涯学習・社会教育実践研究交流会
実行委員会

〈事務局〉 茨城県教育庁総務企画部生涯学習課振興担当
〒310-8588 茨城県水戸市笠原町978番6
E-mail shogaku1@pref.ibaraki.lg.jp
TEL 029-301-5318 FAX 029-301-5339



facebookでつながろう！



関東近県生涯学習・社会教育実践研究交流会のページは
QRコードからどうぞ！